
星降る森

人鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星降る森

【Nコード】

N2131K

【作者名】

人鳥

【あらすじ】

『森の住人』と呼ばれる彼らは、星が動く夜に昇格の儀を執り行う。その中で、星降りの夜——成人の儀が直前まで迫っていた。

幼い頃に出会った『色彩の魔法』

壮大な親友の決意。

主人公ミナは、親友の目標についていくことを決める。森の中で起こる、魔法のファンタジー。

第零章 前夜（前書き）

2度目の投稿、連載では初の投稿となります。

今回はプロローグを、同時に第一話を投稿しました。

つたない文章、物語ですが、最後までお付き合いいただけたら幸いです。

女の子の主人公って、男の子の主人公よりも書きやすいな、なんて
思う今日この頃。

第零章 前夜

聞いてる？　ねえ、聞いているの？

わたしの声が、森の空気に溶けた。彼は何も言わずに、ただ空を見上げている。

「わたし、絶対に成功させるわ」

聞いてる、と思う。

聞いていないようで、いつもちゃんと聞いてくれているから。

わたしよりも細くとんがった耳で、ちゃんと。

「ネルも、成功させてよ？」

ネルはやっぱり空を見上げていたけれど、でも、ちゃんと首を縦に振った。わたしも、ネルが見てる空を見上げた。空には星が無かった。けれど月だけは輝いていて、すこし寂しい感じがした。しばらくそのまま空を見上げていた。

心地よい沈黙がわたしたちをつつみ、夜行性の鳥たちが鳴く声が聞えてくる。やがて、その沈黙も終わりを告げた。

「ミナ」

一瞬空耳かと思ったけれど、わたしを呼んだのはネルだった。

「ボクだけ成功して、キミが成功しないなんてのは駄目だからね」

優しい、静かな声でネルは言った。その視線は、やっぱり月しかない空を見ていた。

「もちろんだよ。わたしを誰だと思ってるの？　この『森の子』二番目の秀才、ミナなんだよ」

トンと自分の胸を叩きながら言う。けれど、それでも失敗することとを考えてしまう。自分自身を勇気付けるために、もう一度自分の胸を叩いた。

効果はあまりなかった。

ネルは少しだけ笑って、立ち上がった。わたしの顔を少しだけ見て、両手を広げる。酷く演技がかった仕草だ。そして、わたしにそ

の笑顔を見せた。

「ミナ、ミナ。ボクはこの森の頂点に立つことにしたよ」

突然何を言い出すのだろう。しかしネルの表情はいつもの儚げな顔じゃなく、力強さがあつた。そしてそれは、とても魅力的な顔だった。わたしは少しドキツとした。けれど、それを悟られないように意識して平静を装った。

「じゃあ、絶対に今回は落とせないわね」

「うん」

そうだ。こんなところで足踏みをしてはいけない。

「できるよね？」

「できるさ」

「絶対だよ？」

「絶対」

しばらく星空を二人で見上げ、そして別れた。

わたしはしばらくそのまま座っていた。

第一章 星の昇る日（前書き）

第零章からの同時投稿です。

とりあえず次の話までは書き終えているので、近いうちに第二章も投稿します。

誤字とか、見つけても笑ってスルーしてくれたらうれしいです。

誰かに読んでもらえるって…快感。

第一章 星の昇る日

わたしはたとえ次の日が何か大切なことがある日であっても、たとえ明日が楽しみで興奮していても、夜はちゃんと眠ることができる。ということは今回の件にはまったく関係なく、ただ、少し寝すぎってしまったというだけだ。朝食の少し前に起きるか寸前に起きるかという違いだけ。本質的には全くと言ってもいいほどに差異がなく、議論するだけ無駄な種類のことだ。よって、わたしは全く気にしない。一日のうちのほんのわずかを無駄にしたらただけだ。

その積み重ねが大変なことになる？

そんなの、誰かが実証したのか。

実証なんて必要ない？

それもそうだ。

わたしは寢床から飛び降りて、食卓に行く前に外に出た。朝の森の空気は少し冷たくて、身震いした。

「ミナ、下りてきてよ」

下を見ると、サトナが手を振っていた。木から飛び降りて、サトナのところに向かっていった。

サトナはわたしと同じ年の女の子だ。森に住んでいるわたしたちには珍しい、三文字の名前。

「どうしたの？」

わたしが聞くと、サトナは明るい笑顔で言った。

「うん、あそぼっ」

この発言は正直、予想外だった。

「え？ でも、今日は儀式だよ？」

そう言つと、サトナは悲しそうにうつむいた。

わたしはよくわからなくなって、サトナが何か言い出すのを待つしかなかった。

「あたしね、今回の儀式……参加しないんだ」

参加——しない？

魔力の無い『森の子』に魔力を授ける大切な儀式なのに？

「どうして？ 失敗したってまた次の機会があるよ？」

「ううん、そういうことじゃなくて……。まだ、『耐性』ができてないんだ」

「……、そっか」

サトナは悲しそうに俯いて、ポツリと呟いた。

「ミナ、ごめん。帰るね。……今日、がんばって」

「ううん、いいよ。ばいばい」

「ばいばい」

サトナは森の奥に消えてしまった。

取り残されたわたしは、家に帰ることにした。朝食も食べてない。元々、外の空気を吸いたかったただけだ。サトナがいるとは思わなかった。……誤解しないで欲しい。別にわたしはサトナのことは嫌いじゃない。ただ、この今日の朝というタイミングで「遊ぼう」なんて言われるとは思わなかったのだ。

わたしたち『森の住人』は木の中で生活をする。巨木が多いこの森では、枝の部分が重なり合い、中には同化したものもある。わたしたちはそこに穴を掘り、家にする。巨木じゃないと、人間と同じくらいの大きさであるわたしたちは生活できない。

木の中で生活する理由？

そんなこと、わたしは知らない。

「おはよお」

家に入って、同居している『森の子』たちに挨拶する。

「おはよう」

一番年上のハギ。男の子。十六歳。

「おはよー」

一番年下のコズ。女の子。八歳。

わたしは十三歳。

わたしたちは、この三人で生活している。魔力を授かった『森の

子』を『森の人』と呼び、彼らは魔力の満ちているエステア湖の周
辺で生活している。でも、わたしたちにはエステア湖の魔力は強
すぎる。だから、魔力の『耐性』ができて、魔力を授かるまでエ
ステア湖には住めない。今日の儀式は、そんなわたしたちが『森
の人』になるための大切な儀式なのだ。

『森の人』になって初めて一人前。いわば成人の儀式というわけ
だ。

「今日がんばってね、ミナ」

コズがわたしの短パンのすそを引っ張りながら言った。

「うん」

しゃがんでコズの頭を撫でてやる。コズは「えへへ」と、笑った。

「ハギは今日こそってトコかな？」

ハギは苦笑しながら頭をかいた。

「まいったな。まあ、もう四回失敗しちゃったからな。年二回だか
ら……二年も棒に振っちゃったのか」

「おかげでわたしたちと一緒に二年も長く生活できたけどね」

「はは。たしかにな。でも、今回こそは成功させないと」

ハギは握りこぶしを作って意気込んでいる。

と、さっきまで笑っていたコズが寂しそうな顔でハギに飛びつい
た。

「おわっと」

ハギはコズを抱きとめてみせた。コズはもの凄く悲しそうな顔を
している。

「どうしたんだ？」

ハギが驚いて、でも、優しい声でコズに聞いた。

「がんばって欲しいけど、二人がいなくなっちゃうの……イヤッ」
もう、完全に泣いてしまっていた。

ハギはコズを右手で抱いて、空いた左手でコズの頭を撫でた。

「大丈夫。ちゃんと会いに来るさ。それに、他の『森の子』たちも
いるよ。僕たちみたいに一緒に生活する、ね」

「わたしも会いに来るよ」

わたしもそう言っ、コズに笑いかけた。コズはそれ以上、何も言わず、ただ泣いている。

わかっていたことだった。

わたしたち三人の中で、コズだけが歳が大きく離れている。長寿であるわたしたちにとって、成長すれば年齢差など大したものではないけど、小さいうち、特に『森の子』たちにとって、その差は重大だ。魔力に対する『耐性』がで始めるのが、個人差があるものの今のわたしの年齢である十三歳くらいからだ。だから、どれだけがなばつても、コズと別れない結末などありはしない。『森の人』になるのは、わたしたち『森の子』たち全員の夢だから。「失敗するかもしれないし」なんて、言えるはずもなかった。言ってしまう、それが現実になってしまふかもしれないと思つたし、なにより、そんなことを言つて成功したらコズになんて言えいいのか、わたしにはわからない。

ネル……わたしはコズになんて言葉をかければいいの？

結局、何も言えないまま朝食の席に座つた。

重苦しい朝食を終え、逃げるように外に出た。今日の準備はちゃんとできているし、ゆっくりと心を落ち着かせる時間も欲しい。

森は儀式を今日に控え、いつもよりも魔力の濃度が高い。

わたしも今日の儀式で成功すれば、この魔力が使える。そう思うだけで、わたしの心は躍つた。

一番に何をしよう。空気に色をつけてみようか。光らせてみようか。わたしはある『森の人』が見せてくれた魔法を思い出していた。

まだコズくらいだった頃、一度だけ見た『色彩』の魔法。その魔法を見た日、わたしはエステア湖の近くにいた。その当時から、わたしの『耐性』は強かつた。それにその日は、湖の魔力が弱っている時期でもあつた。

「おや？　なんで『森の子』がここに……？」

そこには一人の『森の人』がいた。顔は覚えてないけど、女性だったと思う。

「えつとえと、あたしエステア湖が見たくって」

わたしはそう言って、その女性のところに近づいた。女性は驚いた様子で、しかし、笑みは保たれていた。

「そうかそうか。しかし君、苦しくはないのかね？」

わたしには言っている意味がわからなかった。当時のわたしは、魔力の存在をあまり認識していなかった。家族もみんなわたしと同じくらいの年齢だったからかもしれない。当時の家族とは、とある事情で離れて暮らしているけれど、それはまた別の物語。

「うん。ぜんぜん、くるしくないよ」

わたしは笑い、女性は笑わなかった。

ただ、不思議そうにわたしを見ていた。

「そうかそうか。ならば、少し凄いものを見せてあげよう」

女性はしゃがみ、わたしと視線の高さを合わせた。そして手をわたしの頭の上に置いて、優しい笑顔を見せた。

「えっ？　なにに？」

当時のわたしにとって、『凄いもの』といえば人の形をした木の根だったり、とてもきれいな石だったり、そういったものだった。魔法の存在は、全く知らなかった。魔法という言葉さえ、聞いたことがなかった。

「ふふ。よく見ているがいいよ」

そういうと女性は立ち上がり、右手の人差し指を伸ばした。ぽうつと、人差し指に光が灯り、あたりに生えた草や木に色が付いている。女性は手を動かして、線を描いた。赤色だったと思う。

「『色彩』の魔法という。『虹色の画家』という名前さ」

「す、すごいすごい！」

それまで見たこともないものだった。わたしはきゃーきゃー叫びながら、その女性の指先を目で追った。魔法という言葉の意味はわ

からなかったけれど、とにかく凄いということだけはわかった。

喜ぶわたしを見て女性は目を細めた。とても優しい目だった。

「そうかそうか。凄いかな。なら、もうすこし凄いのを……」

そう言つて、女性は手のひらにその光を移した。

「きやーきやー！」

手のひらから、さつきとは比べ物にならないほどの光が溢れた。

光は木を、地面を、そして、空をも染めた。

「どうだい？　これはね、『虹色の森』という名前なのだよ」

女性はわたしに向かって微笑んだ。

「すごいよ！　あたしにも教えて！」

しかし、女性は首を横に振った。残念そうに、そして辛そうに。

「それはできないよ。君が大きくなって『森の人』になったとき、
もしも出会えたなら、教えてあげよう。もっとも、そのころには自
分で扱えるだろうけどね」

「ううん」

言っていることの殆どの意味が分からなかった。首をかしげるわ
たしに、女性は優しく微笑んだ。笑顔も、きれいだったように思う。
顔を忘れていて、その行為しか覚えていないから、ハッキリしたこ
とがわからない。

「いずれわかるさ。さ、そろそろお家に帰るといい」

そう言つて、その女性はわたしの頭を撫でてくれた。

「えっ！」

太陽の位置を確認した。言われてみれば、確かに夜が近づいてい
る。

「うんっ！　また会えるといいね！」

女性はうなずいて、そしてわたしに手を振った。

「おねえさん、お名前は？」

「××××だよ。君は？」

「あたし、ミナ」

わたしは女性に手を振り、家路に着いた。

物思いから我に返ると、森の景色が変わっていた。どうやら、ほぼ無意識に歩いていたようだ。そして多分、エステア湖に近づいている。魔力の濃度がさっきよりも上がっている。

魔力の濃度が高い森は、実は気をつけなければならない。『森の住人』の敵となる獣たち——わたしたちはゴアビーストと呼んでいる——が活発化するからだ。ゴアビーストたちの多くは魔力を筋力に変換して使う。稀に『森の人』のように放出して使うが、考慮に値しないほど低い確率であることも確かだ。

わたしは一応の用心をしながら、森の中を歩いた。ゴアビーストが出てきても、すぐに逃げられるように。『森の子』は絶対にゴアビーストには勝てない。そもそも、『森の人』ですら、ゴアビーストとは出会わないようにしている。魔力は殆ど対等だけど、わたしたちは争うことを良しとしない種族だからだ。そういった争いごとは、『森の守護者』と呼ばれる人たちが対応してくれる。と、聞いている。まあ、『森の住人』とゴアビーストの間には『不可侵の掟』があり、そうそう襲われることもないのだけれど。用心するに越したことはないだろう。

「ミナ」

後ろからわたしを呼ぶ声がして、振り返るとネルが立っていた。

「ネル」

「どうしたの？ 今日が儀式なのに」

いつもの優しい、静かな声だ。ただし、若干緊張しているようにも思える。

「ちよつと散歩。準備はできてるから、落ち着く時間が欲しいの」「そうだね。ボクもそう思って散歩してたんだ」

ネルはわたしの隣に来た。わたしは特に何を言っわけでもなく、歩き出した。ネルはわたしについて歩いてくる。

「今度こそは大丈夫だよな」

ネルはただ前を見ていた。

無視しているわけじゃない。と思う。

もしかしたら聞えていないのかもしれない。

「大丈夫だよ」

長い沈黙のあと、ネルは頷いた。それはまるで、自分に言い聞かせているようでもあった。もちろんわたしにしたってネルに聞いたのは、そう言っただけだったからだ。

「『耐性』もちゃんとできてるしね」

「ハギはもう今回で五回目だよ」

「個人差があるんだよ。僕たちはきつと大丈夫」

何の根拠も無いその言葉が、わたしにはうれしかった。ネルがそう言っただけで、本当になるような気がした。

「そうだね」

わたしはただ頷くしかできなかった。昨日あんな大口叩いたのに、わたしは最早自信をなくしてしまっていた。恥ずかしい限りである。「成功したらさ……ミナの見たっていう、『色彩』の魔法を見せてよ」

「うん」

その言葉を最後に、わたしたちは何もしゃべらなくなった。

もうすぐ昼になる。そうすれば家に戻って、そして儀式に行くために身なりを整えなくてはいけない。もう少し、もう少し、わたしはネルと一緒にいたい。

けれど、ネルはわたしに、響く優しい声で、

「昼だね。帰ろうか」

と、空を見上げて言った。

わたしも空を見上げた。太陽が真上に昇っている。

「うん」

あとちよつと、なんてそんなこと言えるはずも無く、わたしたちはその場で別れた。

次に会うのは儀式のとき。じゃあ一人が失敗して、一人が成功したら？ 今度はいつ会えるの？ わたしはただ、一緒にいたいだけなのに。

今来た道ではなく、家まで直進できる方向に向かって歩く。元々道なんてあつてないようなもので、ある道は獣が作ったものだ。わたしが従う必要はない。

だんだん早足になって、最後には走り出していた。

昼食を食べ終えて、ハギとわたしはすぐに支度を始めた。

緑と青の曲線の書かれた白いローブを地肌の上に来て、フードを深く被る。両の腕には、金のブレスレット。両の足首には、緑のアンクレット。首には青いチョーカーをつける。この格好に何の意味があるかは知らないけど、儀式を受ける『森の子』はみんなこうする。わたしだって、例外じゃない。男女ともに、衣装に違いは無い。約百八十日ぶりに着るローブは、少し重たく感じた。ふだん身軽な服装で生活をしているから、こういった衣装には慣れていない。

「……はあ。早く脱ぎたい」

ローブは重く、しかしそれだけしか着ていないから内側が気持ち悪い。たった今着たばかりだが、早速脱ぎたくなった。

我ながら笑うしかない。

笑うことはできなかったけれど。

隣から物音が聞える。ハギが儀式の準備をしているのだろう。ハギはさっきの会話からわかるとおり、今回で五回目の儀式となる。年二回、『星昇る夜』にだけ行われるこの儀式は、難易度はそこそこ高い。エステア湖に到着するまでに諦めてしまふ『森の子』も少なからずいる。

儀式の内容は、単純だ。『星昇る夜』にエステア湖まで歩いていき、湖の水を全身に浴びるのだ。ただし、このときに湖の中に手以外の部位を入れてはいけない。肘まではいいのだが、それ以上はいけないらしい。理由は知らない。けれど、その制約があるためにこの儀式は難易度が上がっているのは確かだ。長い時間、エステア湖の放つ魔力に耐えなくてはいけないからだ。

エステア湖の放つ魔力に耐える。これが儀式の内容であることは、

誰もが知っていた。

エステア湖はこの広大な森の中心にある。当然、そこまで歩いていかなくてもいけない。木々を飛び移って移動したりするのはご法度だ。ゆっくりと湖に近づいて、ゆっくり浴びる。これに意味がある。らしい。

「ミナ、準備できた？」

わたしの部屋を仕切る大きな葉の向こうから、ハギが言った。その声から、ハギが緊張していることがわかった。

「うん」

「じゃあ、木の下で待つてるからな」

「わかった」

ハギが木からはしごを使って下りているのがわかる。ぎしぎし、という音がきこえてくるからだ。

いつもはみんな飛び降りるのだが、今日に限ってはそれも許されない。わたしも、ハギに習ってはしごを使って下りた。少し離れた場所に、わたしと全く同じ格好をしたハギが立っていた。木の上を見てみると、コズが手を振っていた。それに手を振って返して、ハギのところへ歩いていった。

走ってはいけない。

「じゃ、行こうか」

わたしが隣に並んだのを確認して、ハギが言った。わたしは頷いて、彼の横を歩いた。

森の魔力の濃度がさらに高くなり、それは湖に近づくにしたがって明確になっていった。魔力に圧される感覚が、わたしたちを襲う。ハギは少し苦しそうな表情になってきた。ハギは、わたしよりも『耐性』が低い。というよりも、わたしの『耐性』がこの年齢にしては非常に高い。いや、でも、それでもハギの『耐性』は普通よりも低いと思う。

ざわざわと、辺りに生き物の気配が多くなってきた。たぶん、『森の子』たちだろう。わたしたちのように、儀式を受けに来た『森

の子』たちだ。ゴアビーストでないことを切に願う。出会っても走るわけにはいかず、『森の人』は湖の警護に当たっている。『森の守護者』も魔力が暴走しないように、森中に散って制御している。つまり、助けが来ることは期待できない。走って逃げて、次の儀式まで待つのは、わたしは嫌だ。

どれくらい歩いただろうか。太陽は殆ど沈み、暗くなってきた。そろそろ着いてもいい頃合だ。魔力の濃度が高く、ハギはとても苦しそうだ。わたしも、すこし苦しくなってきた。ちゃんと水を浴びられるだろうか。

「ハギ、大丈夫？」

心配になってハギに聞いた。

「ああ……。ミナは大丈夫か？」

ハギの額には大粒の汗が浮かんでいる。

「うん。平気平気」

意識して元氣そうに振舞って、ハギに笑いかけた。ハギも小さく笑ってくれた。

「星が昇る前に終わらせなくちゃな」

ハギが呟いた。

「それって絶対条件だよ」

そうだ。『星昇る夜』に行われるこの儀式は、星が昇ってしまうとできない。湖と星の魔力が合わさっている状態ではじめて、森はわたしたちに魔力が与えるからだ。

「まあ、まだ時間はある。焦らずに行こう」

「うん」

魔力の濃度がどんどん高くなっていく。加速度的に強くなる魔力は、湖に近づいていることの証明だった。儀式の最終段階に近づいている。

わたしの心は高ぶっている。もうすぐ、わたしに魔力が宿る。半年前は、水を浴びる前に辞退したけど、今回はまだまだ余裕がある。

成功は確実だ。ネルはわたしよりも強い『耐性』を持っている。だから、この儀式が終わったら一緒に喜びを分かち合おう。そして、『森の人』として共に生きるんだ。最終的には『星降りの夜』の儀式を成功させて、『森の守護者』になる。きっと、ネルなら『森の王』にも届くはず。

ねえ、聞える？

わたしたちならできるよ。

心の中でそう呟く。

きっと、彼に届く。

第一章 星の昇る日 後編（前書き）

まことに勝手ながら、第一章を分割し、二部構成と致しました。内容には変更はありません。また、web小説の経験が非常に浅いので、お気づきの点がありましたらご遠慮なく教えてください。次回投稿時に活かすことができます。

第一章 星の昇る日 後編

景色が開けて、目の前にエステア湖が広がった。星の魔力が加わっているからか、湖は輝いて見える。湖には、すでに『森の子』たちの水を浴びていた。

「……きれいなね」

——と、ハギの体がぐらりと傾いた。

「ちよつ、大丈夫？」

ハギの体を抱きとめる。息が、荒れている。

「はあ……はあ、大丈夫。今回は失敗できないからね。こんなところで終われないさ」

ハギは自分の体を自らで支えて立ち上がった。息は、やっぱり荒れている。汗もさつき見たときよりも、量が増えている。

「大丈夫？」

もう一度きいてみる。ハギは首肯してわたしの前を歩いていく。

「さあ……浴びようじゃないか」

湖に近づき、こちらに振り返って言った。玉の汗が吹き出ているハギは、見ていて、わたしが苦しかった。

「……うん」

わたしには頷くことしかできなくて、ハギの横にしゃがんだ。被っていたフードを取って、水をすくい上げた。水は冷たいはずなのに、手のひらはとても熱い。それを、いきなり頭にかけるのは怖くて、腕に流した。ローブの中に水が入ってきて、腕を濡らす。腕が熱くなった。

ふと、わたしは嫌な予感がしてハギを見た。

ハギは、まだ湖に手を浸けられずにいた。

ハギは湖に手を伸ばしたり、戻したりしていた。伸ばした手を、湖面で止め、また引き戻す。

「どうしたの？」

「……怖いんだよ。知ってるかい？ 湖の水の魔力は、森に漂う魔力の三倍の濃度だ。キミならともかく、僕が触れるのは無理だよ。次回でもっと『耐性』できないとね」

わたしはハツとして、周りを見た。さっきまでいた『森の子』の数が、かなり減っている。わたし少し水を浴びている間に、半数は湖から離れていた。

「——っ」

残っている『森の子』の中にネルを探したけど、いくら湖が輝いているとはいえ、陽が沈んだ森の中では顔が確認できなかった。

みんな、諦めて帰ってしまった。

夢を先延ばしにしてしまった。

半年前のわたしのように。

「ミナ、僕も帰るよ」

ハギは立ち上がっていた。ハギの顔には、今までわたしが見たこともないような、深いかげがあった。

「僕にはここの魔力は強すぎる」

わたしの返事を待たず、ハギは帰ってしまった。

わたしは何も言うこともできず、また水をすくい上げた。

「……ばか」

水を頭にかけた。続けて、顔にもかけた。水が流れて、ロープの中に入ってくる。

——突然頭の中が揺れた。めまいにも似た感覚がわたしを襲う。

「あああっ！」

思わず声を上げ、頭を押さえた。しばらくそうしていると、揺れは収まった。そして、確信した。湖の中に手以外の部位を入れてはいけない、という制約は、身の安全の為なのだ。もし仮に、一気に全身に浴びることがあれば、その『森の子』は魔力に吞まれてしまうだろう。運が悪ければ死んでしまうかもしれない。わたしは、先ほどの自分の行動を恥じた。

「はあ……はあ……。もつと、もつとゆっくり」

呟いて、今度は足にかけた。さっき頭や顔にかけたから、もう殆どの部位が水に濡れている。でも、背中を濡らさなくてはいけないというか、どれくらい濡らせばいいのだろう。

「あの……すいません」

わたしは一番近くに浮いていた『森の人』に声をかけた。

「うん？ 何だい？」

その『森の人』の声は若い男性のようだった。顔が見えなかったため、声をかけるまでわからなかった。たぶん、わたしの予想は当たっているはず。外れたところで全く困りはしないけれど。

「あの……どのくらい水を浴びればいいんですか？」

わたしがそう聞くと、その『森の人』は納得したように笑った。

「ああ、君が着ているそのローブの曲線が完全に消えるまでだよ。その曲線は、着ている人の魔力に反応して消えるんだ。確認は僕たちがするから、とりあえず自分が見える範囲が消えたら言ってね。そしたら、僕が次に言うことを言うから」

『森の人』はまた辺りを見回し始めた。

どうやら、わたしが知っていた儀式の方法は、簡略化された内容だったらしい。最後の部分が抜け落ちていた。大筋はあつてるけど。わたしは自分のローブを見てみた。言われてみれば、曲線が少し薄くなっている。でも、わたしの着ているローブは、後ろの首元、フードで隠れる部分に濃い紋様が描かれている。それが消えるのは手間が掛かりそうだ。いや、みんな同じかもしれない。ハギのローブはどうだったのだろう。

すくっては浴び、すくっては浴び、何度も繰り返した。途中、何度か気分が悪くなったけれど、我慢して続けた。全身が熱くなって全身余すところ無く、水がかかった。曲線も、わたしが見た限り消えている。

終わった（自己申告）。

「あの、消えたと思うんですけど」

さっきの『森の人』声をかける。

「おっ、きたね」

『森の人』は嬉しそうにこちらにやってきた。地面に下りて、わたしのロープを確認する。

「ちよっとごめんよ」

そう言つと、『森の人』はフードを持ち上げた。そして、すぐに手を放した。

「どうですか？」

「うん。大丈夫そうだよ」

嬉しくなつて、わたしは後ろに勢いよく振り返つた。

「さあ、最終段階やろうか」

そういえば、次に行ふことがあつたんだっけ。

わたしは頷いて立ち上がった。

「どうすればいいんですか？」

聞くと、『森の人』は小さく笑つた。

「そんなに身構える必要は無いよ。簡単なことだよ——湖の水をてのひらですくつて飲むだけだよ」

飲む？

エステア湖と星の魔力が大量に溶け込んだこの水を？

浴びただけで体が熱くなるこの水を？

「……」

わたしは怖くなつて、ただ湖面を見ていた。

輝く湖が、自分にとって禍々しいものに見えた。

「大丈夫だよ。僕もちゃんと飲んださ」

そう言つて、『森の人』は嘆息した。

「……わかつたよ。今、僕が飲んで見せよう」

「えっ？」

わたしが声を上げたときには、『森の人』はすでに水を飲んでいました。

わたしは黙つて彼を見ていた。

一回。

二回。

三回。

四回。

五回。

『森の人』は水を飲んだ。けれど、何が起こるわけでもなく、平然とした表情でわたしのところに歩いてきた。

「さあ、飲んでみなよ。ああ、別に飲むのは一回でいいからね」
こうなってしまうては後には引けない。わたしはしゃがんだ。
湖面が近くなる。

水は妖しく輝いてる。

わたしは両手で水をすくった。

「さ、それを飲めば『森の人』になれるよ」

後ろから『森の人』の声が聞えた。

周りを見てみると、他の『森の子』たちは水を浴びている最中だった。

今、これを飲めばわたしが一番だ。

そう思うことで、恐怖心を消し去った。

すくった水を、口の中に流し込んで、飲み込んだ。

熱いスープを飲んだときのように、口の中が熱くなって、食道も胃も熱くなった。

全身が熱くなって、溶けるんじゃないかと思った。

熱くて仕方が無くて、わたしは胸を押さえた。そうでもしないと、耐えられない熱さだ。

「飲めたね」

ぱちぱち、と後ろから小さな拍手が聞えた。ひどく落ち着いた、けれど嬉しそうな声だった。

「ふう……、はあつ、……はあ」

わたしの呼吸が整うのを待って、『森の人』は言った。

「君……名前は？」

「え？ あつ、あの、ミナです」

わたしが名乗ると、『森の人』は宙に浮いて、湖の真ん中まで進んでいった。

「……………」

黙って『森の人』を見ていると、いきなり彼の体が発光しだした。突然光が溢れた湖の真ん中に、自然と視線が集まった。

「今回の成功者の第一号が現れた！ 名をミナという！」

『森の人』が叫ぶと辺りにざわめきが起こり、「負けてられないな」という小さく優しい声が聞えてきた——気がした。

「ネル？」

辺りを見回しても、ネルと思しき人物は見つからなかった。なにより、誰の顔も見えない。

空耳だった。

やがて光は消え、『森の人』がわたしのところへやって来た。

「おめでとう。たった今から君は『森の人』だよ。魔法はまあ、明日から使えると思うよ。自分の限界は自分で見極めてね。あとは自分のイメージと勘、それから経験だよ」

『森の人』は自分のことのように喜んでくれて、わたしも自然と顔がほころんだ。

「ありがとうございます。……あの、もう少しここでいてもいいですか？」

「もちろんだよ。なんなら、星が昇るのを見るといいよ。とても綺麗なんだ」

「はい。そうします」

わたしが頷くと、『森の人』は小さく笑って警護に戻った。

一人呆けたように座っていた。

彼の名前が呼ばれるのを待つあいだ。

何人もの『森の子』……いや、『森の人』たちの名前が呼ばれていくけど、彼の名前は呼ばれない。

ねえ、聞えてる？

わたし、待ってるよ？

早く成功させてよ。

ねえ……ねえ。

と、中に浮いていた『森の人』たちの様子がおかしくなった。

「どうしたんだろ」

『森の人』を見てみると、彼らはみんな湖の上から姿を消した。

——星が昇る。

直感した。そして、いまだ呼ばれる彼を思うと無性に悲しくなってくる。

「ばか。ばか。どうして諦めちゃうのっ。わたしでも成功したんだよ？」

誰も聞くことの無い言葉を呟き、湖を見た。

そして、言葉を失った。

そこには、発光した『森の人』がいた。誰か、成功者がいる。しかし成功者の発表は、別の『森の人』の叫びによって中断された。

「馬鹿野郎！ 今すぐ湖面から離れる！ 星が昇るぞ！」

発表をしようとしていた『森の人』は、苦虫を噛み潰したような顔で湖面から姿を消した。

瞬間、湖の輝きが増した。

金色の光が、帯のように天に昇る。それが灯台の灯のように動いて、空を照らした。わあっ、と歓声が上がリ、それに応えたいのか、さらに輝きが増した。

光に満ちたエステア湖。わたしは思わず手で光を遮った。直視するには眩しすぎる。強い輝きを放つ湖に、また新たな変化が起きた。湖から強大な魔力が放出され、それと同時に湖の中心が大きくドームさながらに盛り上がった。そして、そのドームから大量の、いや、無数のといったほうが正しい、小さな何かの破片のようなものが飛び出していった。それは一直線に空へと向かい、夜空にちりば

められた。

ある破片は、上昇の途中で別の破片と結びつき、ある破片は見えなくなるほど遠くに消えた。上昇していく破片のあとに、小さなきらめきが残った。それは少し光ると消えて、ほんの刹那だけど、わたしたちの目に焼きついていく。

『星の破片』は空へと帰り、空は満点の星空へと変貌した。空に光が満ちる。月だけが光っていた寂しげな空は一転、星たちが輝く明るく、まるで希望が詰まっているような空へと変貌した。わたしの個人的なことを言ってしまうえば、月だけの空のほうが好きなのだけれど、これはこれできれいだと思う。

久しぶりに空に姿を現した星は、次に訪れる『星降りの夜』まで空で輝き続ける。そして、『星降りの夜』にまた湖に落ちてくる。星は空と湖を循環している。

世界中に点在するこういった湖が魔力の源で、落ちてきてまた空に戻る星もまた、魔力の源だ。

星が昇っていく間、わたしは何も言うことができなかった。身動きすらできなかった。あまりに美しい情景に心を奪われたからだ。

我に返って辺りを見たとき、わたしは絶句した。

儀式に失敗した『森の子』たちが、あまりに強大な魔力にあてられて倒れていた。数日は目を覚まさないだろう。あくまでも勝手な予想だけど。

星の上昇が終わり、エステア湖には静寂が戻ってきた。そして、程なくして湖の中心に『森の人』が現れた。体が発光している。さつき、成功者の発表をしようとしていた『森の人』であることは間違いなかった。

「今回最後の成功者を発表する！」

『森の人』は意識してか無意識にか、そこで間を空けた。

みんなの視線が一斉に『森の人』に向かう。祈りに似た気持ちで、わたしはその『森の人』

を見た。

ネルネル、ネル。あの約束、覚えてる？

ああ、昨日の約束だよ。森の頂点に立つなら、この程度で負けてちゃダメだよ。

『森の王』は、もともとと大変なんだから。

『森の人』が大げさに両手を広げた。

気付けばわたしは胸の前で両手を合わせていて、きつく目を閉じていた。

「名を——ネルという！」

ネルはエステア湖から少し離れた場所で座っていた。昨夜一緒に話をした場所だ。

わたしは『森の人』に魔法で体とローブを乾かしてもらっていたけど、ネルの体とローブはまだ濡れていた。

「ネル！」

わたしは後ろからネルを呼んだ。

ネルは返事をせずに、ただ空を見上げている。無視しているわけじゃない。聞えてる。

「ミナ」

大きく間を開けて、あの優しい声をわたしにかけてくれた。顔だけをこちらに向けて、少し微笑んでまた空を見上げた。

「ミナ——ボくら『森の人』になっただね」

空を見上げたままそう言ったネルの表情は、今まで見た中で一番輝いていた。

「そつだよ。そして、『星降りの夜』で儀式に成功したら『森の守護者』になれる。『森の守護者』になれたら、『森の王』になるのも夢じゃないわ」

わたしも気分が高揚していた。

「ボクは『森の王』になる」ネルの声は誓いをたてるような力強さがあった。「そして、この森を守り続けるんだ」

ネルは支えていた手を放して、仰向けに寝た。わたしも隣に並んで寝て見た。空には、さつき昇った星が光っている。

「ねえ、ミナ」

「うん？」

「ミナは、どうするの？」

わたしはどうする。わからない。わからない。わからない。

わたしの世界はネルを中心に回ってて、魔法の世界は『色彩の魔法』が全てだった。

わからない。わからない。わからない。わからない。

わたしが一体何がしたいのか。『森の人』になつて……。

今までは……ネルを追いかけていただけだった。

……だったら——これからも追いかけて続けよう。『森の守護者』になつて、『森の王』のネルを助ける。それはきつと森のためになる。『わたしは……』今までずっと一緒にいたけれど、口に出して言うのは初めてだ。『……わたしは、ずっとネルのそばでいるわ。ネルと一緒に森を守るの』

言つてやった。わたしは隣で一緒になつて寝そべっているネルの顔が見えなかった。でも、ネルがこちらを見ているのは、気配でわかった。

ねえ、届いた？ 気持ち。

「……そう。ありがとう」

いつもよりも静かで、優しい声だった。わたしの心が、また洗われた。

ネルは立ち上がつて、わたしに手を差し出した。

「これからよろしくね。ミナ」

「うん」

わたしは一瞬も迷う事無く——その手を握り返した。

その日、わたしたちは特にとりのめの無い話をして、何を話すわけでもなく空を見上げて、いい加減帰らなくてはいけないと思つて

しまう頃合まで、そこにいた。でも、そのなんでもない時間が、わたしにとっては楽しいものだった。ネルは終始笑顔でわたしを見ていた。

ネルは家を出るのが遅くなって、湖に着いた途端、全力で水を浴びて飲んだらしい。無茶をする。わたしとネルの『耐性』にはとてつもないほどの差があるのかもしれない。

あとから気付いたけど、ネルはあれでも興奮していたようだ。『森の人』になれたことが、嬉しかったんだ。わたしは、年に一度見られるか見られないかの、貴重なネルを見た。

たぶん、違いはわたしにしかわからないだろうけど。

けどわたしにはわかる違いが、確かにそこにはあったんだ。

ねえ、ネル。

わたし——きみの隣で歩いてもいいかな？

いい、よね。

ダメ、かな？

第二章 空で星が光る日々―1（前書き）

第二章 part 1です。最近、一度に投稿する文章量が多いような気がしてきたのですが、どうでしょうか。

第二章 空で星が光る日々―1

少しいいことがあった翌日は、なぜか普段とは違った心持になる。そしてもちろん、今がその状態なのだが、しかし、素直には喜べないのであった。

わたしは家を出ることになった。『森の人』になったわたしは、エステア湖周辺に移動する必要があった。引越し先はこれから決める。これも、『掟』みたいなものだ。

「ミナア、会いに来てくれるんだよね？　ね？」

家から出て行こうとしたとき、コズがわたしに飛び掛ってきて、頬を涙で濡らしていた。わたしの服を掴む両手は、力が入りすぎて震えている。

「うん。絶対、会いに来るわ」

今できる最大限の笑顔で答え、コズを下ろした。

「絶対だよ？　絶対だよ？　嘘ついたら葬花食べさせるんだからね！」

わたしに死ねというのか？

というよりも、会えない相手に食べさせられないだろ？

葬花は文字通り、『葬る花』だ。葬式のときに手向ける花じゃなくて、もの凄い毒がある。茎から出てくる汁の毒素が一番強くて、触るだけで皮膚が腐ってしまう。それを食べたら……確実に死んじやう。

「は……は、はは。絶対に約束破らないよ。絶対に会いに来るわよ」
まだ、わたしは生きたいのよ。コズならわたしを探し当てても、葬花を食べさせそうだ。

わたしはまだ、平均寿命の十分の一も生きてない。

コズの頭をそつと撫で、わたしは家を出た。ハギは家にはいなかった。たぶん、わたしと顔を合わせにくいんだろう。わたしも、会ったときどういう顔で会えばいいのかわからない。

『森の人』になっても、特に変化は起きなかった。昨日の『森の人』の話によると、今日から魔法が使えるようだけど、魔法の使い方がわからない。今あるのは、昨日よりも強くなった『耐性』だけだ。

森を進み、エステア湖に着いた。ここで、ネルと待ち合わせをしている。ネルはまだ到着していないようだ。

「魔法……使いたいな」

湖の水を手ですくってみた。昨日のような輝きは最早無く、魔力も極端に減っていた。手ですくっても手は熱くならないし、ここまです近づいても苦しさは全くない。もしかしたら、わたしに『耐性』ができたからなのかもしれないが、それでも、森の魔力が減っていることは事実だろう。

でもまあ、すぐに元に戻るはずだ。いつもこういうサイクルであるはずだ。でなければ今頃大騒ぎだ。

「ミナ、ミナ」

わたしを呼ぶ声がして後ろを振り返ると、ネルが立っていた。

「あ、ネル。おはよう」

「……ん、おはよう」

いつもの、あまりしゃべらないネルがそこにいた。いつもの静かな声で、呟くような話し方だ。

「ねえ、ネル。どうやって魔法使うか知ってる？」

たぶん知らないと思う。知っていたら、逆にシヨックだ。

わたしが知らないのに、なんでネルが知ってるのよ！ってな感じだ。

「………、知ってるよ」

知っているらしい。何処からそういう情報を得ているのか、わたしにはさっぱりわからない。

「……ボクはキミよりも『森の人』とよく話をするから。でね、手は対象や方向、範囲を決めるために使うんだって。あとは、自分の

イメージらしいよ」

よくわからないけど、それってかなり簡単なことじゃないかと思う。

「あつ、でもね、あまりに大きな変化と効果を期待したら魔力を多く消費しちゃうらしいよ。魔力は『森の人』にとつては生命力みたいなものなんだからね。一回で使い過ぎないように注意してよ」

いきなりよく話すようになった。

わかってる。わたしを心配しているんだ。

全く、いい友達を持ったものだ。

「うん。ネル、ネルはもう魔法使ってみたの？」

使い方を知っているなら、もしかしたら使っているかもしれないと思った。

しかし、返答はわたしの予想を裏切るものだった。

「ううん、使ってないよ」

「えっ？ そうなの？ てっきりもう使っちゃってるって思ったのに」

わたしが驚いたように言うと、ネルはおどけたように頭をかいた。そしてクスクス笑いながら、

「使ったんだけどね」

なんて、そんなことを言った。

「どっちなの？」

「使ったんだよ。最初は難しいけど、慣れれば簡単だね」

ネルはおもむろに両手を合わせた。そしてその手をわたしの胸の前まで寄せて、ゆっくりとその手を開いた。

一匹の白い蝶が、その手の中から飛び出した。

「えっ、えっ？ ええええ！」

蝶はわたしを囲むように飛び回り、そして光の泡となって消えた。それは短い時間だったけれど、確かに飛んでいた。本気で驚き、魔法であることに気付くのに数瞬かった。

「まだ未熟だけどね」

今日から魔法が使えるのだから、それは当たり前。
でも、使えている。

わたしを残してネルがどんどん先に進んでいくような錯覚が、わたしを襲った。

錯覚じゃないのかもしれないけれど。

「さ、ミナもやってみようか」

「えっ？」

いきなりネルがわたしの両手を握った。

暖かい手だった。

「目を閉じて、イメージするんだ。今回はとりあえず蝶でやろう。」

……蝶が自分の手から出てくる姿を」

「う、うん」

言われたとおり目を閉じて、蝶が自分の手から出てくる姿をイメージする。ぽう、と手の中が温かくなった。それに、少しだけ手の辺りが明るくなったような感じがする。あくまで想像だけれど。けれど、それだけで蝶が手の中にいる感覚は無い。少し温かいと感じる程度だ。

「さあ、開けてみて」

わたしの手を放してネルは言ったけど、わたしには蝶が出てくる気は一切しない。からかわれているように思えてきた。

「いいから。とりあえず開けてみなよ」

言われるまま手を開いてみた。

一匹の白い蝶が、手から出た。

何回か羽ばたいて、光の泡となって消えた。

「で、できた！」

できた。できた。できた。

ほんの一瞬だけど、確かに蝶は飛んだ。

わたしの初めての魔法だ。

たぶん、ネルもこの魔法だ。

「凄いよ。ボクは羽ばたくこともしなかったのに」

心底驚いた表情だ。

けれど、それが嘘だとわたしにはすぐにわかった。どこか、そういう気がした。いわゆる、勘というやつだ。

嘘だと思えても、褒めてもらったことが嬉しかった。

「『色彩』の魔法もこの調子でできるといいな」

「そうだね」

エステア湖のほとりで、わたしたちは笑った。特に理由はない。自然と笑みがこぼれていた。

ねえ、ネル。

わかる？ わたし、幸せだよ。とつても。

ねえ、ネル。

君は、幸せ？

第二章 空で星が光る日々―2（前書き）

part 2です。

楽しみにしていたことをいざしようとすると、それは怖いのかも
しれません。

第二章 空で星が光る日々―2

初めてのこととか、今までやりたかったことに関しては、わたしたちはとにかく夢中になる気質の持ち主だ。今回に関して言えば魔法であるわけだが、これはどちらもあるてはまり、とにかく夢中だ。これから一緒に生活する家族の人に対して、申し訳ないと思うほどに夢中だ。

というわけで新居を無事見つけたわたしたちは、毎日新しい魔法に挑戦した。全くできないものや、予想以上の出来になったものも、まあ少なからずあった。そして、そのどれをとっても、ネルの方がうまくできていた。

『色彩』の魔法には、まだ一回も挑戦していない。

「ネルすごいね」

「ありがとう」

ネルが右手に咲かせていた花を消した。光の泡が、ネルの手のひらで踊る。

「ねえミナ」

「なに？」

「どうして、『色彩』の魔法やらないの？」

わたしは『森の人』になってから一度も、『色彩』の魔法を使っていない。できないことも怖いし、できてしまうことも怖い。

『色彩』の魔法は綺麗で、わたしの魔法の原点だけど、でも、それゆえに

怖い。

「もっと練習してからでいいかなって思ってるの」
平静を装ってごまかした。

「怖い」なんて、ネルには言いたくなかった。

「……そう。早くボクも『色彩』の魔法、見てみたいな」
心に、チクリと痛みが走った。

わたしのわがままでネルの期待を先延ばしにしている。儀式の日に見せるって約束したのに。

わたしはまだ、練習すらしていない。

「うん。ちゃんとできるようになったら、きっと」

これほど嘘をつくことが苦しいとは思わなかった。もちろん、わたしが練習すればいいのだけど、なぜかできない。

魔力を込めて、練り始めるとやめてしまう。

魔法を発動することを、体が拒んでいるという感覚。

怖いという気持ちだが、わたしの体を縛っているんだと思う。

「かわりにボクの新しい魔法、見せてあげるよ」

ネルは両手に魔力を込めて、空を支えるかのように両手をあげた。そして手のひらを空に向けた。

「昨日ミナが帰ったあとに、ドズさんに教えてもらったんだ」

そう言つて、ネルは魔力を解放した。

目に見えるようになった魔力が空に伸び、放物線を描いて落ちてくる。森に流れる風が、その魔力を辺りに広げていく。

ネルの手から出された魔力の全てが地面に落ちて、森に還された。

何の変化も起きない。

「何にも、起きないわよ？」

この程度なら、わたしたちが魔法の練習をしているときに何度も見た。失敗したときに、行き場を無くした魔力が漂うからだ。今わたしの前で漂う魔力は、それと全く変わらない。発動の失敗、それを意味している。

「これからだよ」

ネルは表情だけで笑い、指をパチンと鳴らした。

瞬間、強い光がわたしを襲った。

「うわっ！……………わあ、きれい」

とつさに手でおおった目を開くと、光の玉がそこら中で瞬いている。木も、草も、地面も、枯葉も、そして空気さえもが光っている。今度は夜に見たい。きっと、とても綺麗なのだろう。

「ドズさんに聞いたら、『明滅する時』っていう『発光』の魔法の中級術なんだって。初級術ができるって言ったら教えてくれたんだ」
ネルは満足そうに光を見ている。

ドズさんはネルの近所に住む『森の人』で、色々な魔法を知っている。イメージで行う魔法とは違う、もっと形式的な魔法を教えてください。形式的な魔法のほうが、同じような効果の魔法でも、少ない魔力で行えることが多いそうだ。あの蝶が出てきた魔法も、ドズさんから教わったらしい。ただ、あれはイメージするタイプだけど、いいなあ、わたしも教えてもらいたいよ」

「じゃあ、今日会いに行く？」

素敵な誘いだっただけど、今日はこのあとに大切な用事がある。

「ごめんね。今日は駄目なんだ。また今度いいかな？」

ネルは少し残念そうな顔をした。

「うん。……そういえば今日だったね。うん、いつてらっしゃい」

とりとめの無い会話を続けてわたしたちは別れた。

わたしは家には帰らず、そのままある場所に向かった。エステア湖から遠ざかっていく。森から出る少し手前、人が踏み込んでくる領域よりも少し森に入った場所。体を感じる魔力は希薄になっていく。
「三十日くらいしかたってないけど……懐かしい」

見覚えのある木を軽く撫で、森の道を進む。エステア湖の周辺とは違った美しさがあった。今まで気付かなかっただけで、こんなにも美しいなんて。わたしは少し得した気分になった。

失って初めて気付く大切さ。離れてみてわかる心地よさ。こういうことか。

森の様子を眺めながら歩いていると、気付かないうちに目的の場所に辿り着いていた。

「うわあ、懐かしいいいいい」

木に立てかけられたはしごを上って、大きな葉を横に寄せてそこに入った。

「ただいまっ！」

奥からドタバタという、大きな音が聞えてきて、ダダダダという、こちらに近づいてくる音が続いて聞えてきた。

「ミナア！」

コズがわたしに向かって飛びついてきた。

「会いにきたわよお。コズ」

コズは顔を上げ、満面の笑みを見せてくれた。

離れてみてわかる心地よさ、か。

「遅いよっ！……まあ、いいか。ちょっと待っててね」

コズはそう言う奥に走っていつてしまった。

「……………」

わたしは三十日前までわたしの場所だった椅子に座った。帰ってきた。

この椅子にはそう思わせる力がある。

「久しぶりだね。ミナ」

いつの間にか後ろには、三人分のお茶を持ったハギが立っていた。その隣に、コズも立っている。

「久しぶり」

ハギとコズはそれぞれの椅子に座った。コズは満面の笑みで。ハギは、何処か気まずそうな笑顔で。

わたしは苦笑だった。

ハギがお茶を配り終えたの見計らって、わたしは言った。

「とりあえず、ただいま」

「うん。おかえり」

ハギはわたしたちが一緒に住んでいたときと同じように言った。それによって、わたしは少しだけ気が楽になった。

「で、どうなんだい？『森の人』の生活っていうのは」

「こことそんなに変わらないよ。あつ、でも仕事があるのよ」

「ミナは何してるのっ？」

コズが身を乗り出して、わたしに聞いた。ハギは何も言わないけ

ど、たぶん、興味を持つてくれている。わずかだけど、身を前に寄せた。

「早朝にエステア湖に天花っていう花をお供えしているの。天花ってね、とっても魔力が詰まってるのよ」

「なんでその、あま……ばな？　なんでそのお花をお供えするの？」
コズにはよくわからなかったらしい。ハギを見ると、ハギも難解そうな顔をしていた。

「あのね、儀式のあとはエステア湖の魔力が弱まっちゃうの。だから魔力の詰まった天花をお供えして、魔力の回復を促すのよ。そうしないと、『星降りの夜』で星の魔力に負けて大変なことになるらしいわ」

「ふーん」と、わかったのかわからなかったのか、それすらわたしにはわからない返事をして、二人は頷いた。

それにしても不思議な気分だ。いつも教えてもらう立場だったわたしに、今ではハギに『森の人』の仕事を教えている。コズには新しいことを、わたしが知ったばかりのことを教えている。

「ミナは何か魔法、使えるようになったかい？」

本当はこれが聞きたかった——そういう表情だ。ハギはお茶を少し飲んだ。

「うん。ドズって人がいるんだけど、その人が色々教えてくれたのよ。今わたしが一番得意なのは、『発現』の魔法なの。まあ、これはネルが教えてくれたんだけど」

ネルが教えてくれた魔法。あの日から、時間があればずっと、この魔法を練習していた。中級魔法はまだ、ドズさんが駄目って言うから教えてもらえてないけど、もっと練習すればドズさんが教えてくれる予定だ。『小さな友達』という、この魔法の名前も気に入っている。

「見たいー」

コズが笑顔ではしゃいでいる。

「僕も見てみたいな。見せてくれるかい？」

「うん」

頷いて両手を胸の前で合わせる。

魔力が集まったわたしの手が、ほんのりと温かくなった。

「コズ、おいで」

わたしは両手を胸の前に添えたままコズを呼んだ。コズは嬉しそうに椅子から飛び降り、わたしの前までやってきた。

「なあに？」

本当に嬉しそうな笑顔だ。……今からでも、変な虫に変えようか。……冗談。

わたしはしゃがんで顔の高さをコズにあわせた。合わせた両手をコズの胸元に近づけて、ネルがしたように、ゆっくりと開いた。ひらり、ひらりと、赤と青の二匹の蝶がコズの体の回りを飛ぶ。くるくる。

ひらひら。

「きゃー、きゃー」

コズは楽しそうに目と手で、その蝶を追う。しかし蝶はひらり、とコズの手をよけて飛ぶ。

「まてえ！」

コズが少し大きな声で言った。ハギは興味深そうな目で、その蝶を見ている。

やがて、その二匹の蝶は光の泡となって消えた。

コズが寂しそうにその泡を見つめている。

「消えちゃった」

ぽつりと呟き、わたしのほうを見た。

「ミナすごいよっ！ ね？ ハギもそう思うよね！」

さっきのしんみりとした表情から一変、にぱーっと笑う。わたしたちにも自然と笑顔がこぼれた。どこか気まずかった雰囲気、コズの笑顔で流された。

「そうだね。コズにも早くできるようになるといいね」

そう言って、ハギは笑った。なにか悟ったような笑みだった。

「そういえば、ミナ」

「うん？ どしたの？」

「今日は新人の『森の人』と、『森の守護者』の集会があつたんじやないのかい？」

「あつ！ そうだった！」

そういえばそうだ。魔法と『森の人』について、色々と話を聞かなくちゃいけないんだつた。今まで、『森の守護者』の都合が合わずに延び延びになっていた。

どうしてハギが知っているのか疑問に思つたけれど、考えてみれば『森の子』をまとめる仕事を『森の人』から与えられているのだつた。『森の子』の中では偉い人にあたるわけだ。そういう関係で耳に入ってくるのかもしれない。

「ごめん。今日はもう帰るわ」

わたしが慌てて家を出ようとすると、コズの寂しげな声が聞えた。
「えっ！ もう行っちゃうの？」

わたしは振り返つた。

「ごめんね。わたしこれから仕事があるの。また今度会いにくるからね」

「……うん」

わたしは小さく笑つて、家から飛び出し、木から飛び降りた。ガザツ、という枯葉のこすれる音がした。そして、すぐに後悔した。

「あちゃー。枝を飛び移つたほうが速かつたかも」

しかし飛び降りてしまったものは仕方が無い。わたしは全力で森の中を駆け抜けた。左右の視界の流れ方が、『森の子』のときとは桁違いだった。魔力によって、身体能力が底上げされているのかもしれない。きつとそうだ。

「とりあえず、エステア湖まで着けば問題ないか」

ちょうど良いところに大きな岩があつたので、わたしはその岩に飛び乗り、もう一度飛んで、木の枝に飛び乗つた。

「よし」

わたしは一気に、枝から枝へ飛び移った。

第二章 空に星の光る日々―3（前書き）

part 3です。

第二章の前半部分がここまでとなり、part 4から後半です。

第二章 空に星の光る日々―3

集会の会場である聖堂に着いたのは、集会がそろそろ始まる雰囲気になったころだ。巨木を根元から大きく穴を開けたそれは、とても壮大だった。とにかく、木が健康だ。そして、内装もありえないくらいに整えられている。森の魔力の結晶から作られた調度品が、聖堂内を埋めていた。

「遅かったね」

何をどうしていいかわからず、うろろろしていると後ろから声が掛かった。とても、静かな声だった。誰の声か、振り返らなくてもわかった。

「ネル」

振り返ると、少し離れた場所にネルが立っていた。ネルは小さく笑って、こちらにやってきた。

「今日の集会は、ちゃんと聞いとかないとね」

「へ？」

別にこの出席しなくても、前にドズさんから聞いている。わたしにとつては、ただの面倒な行事の一つに過ぎない。

「何言ってるの？ 『森の守護者』や『森の王』になるのに、『森の守護者』の話を聞いておかないと。ドズさんが言い忘れてることもあるかもだよ」

ああ、そういうことか。余談だけど、『森の人』になつてから口数増えたなあ。前の無口なほうが好きだ。けれど声は静かで優しいのに違いは無いから、問題は無い。それに、口数で好きだの嫌いだの、そんなのはおかしい。ネルはネルであつて、たとえ表面が変わろうとも根元からは変わらないと思う。

「そういうことね。わかったわ。ネル、寝ちや駄目よ」

わたしは人差し指を立てて、言った。ネルは少し笑った。

「寝ないよ。ミナじやあるまいし」

……。

ネルにわたしはそういう風に見えるのかな？

冗談？ 違う？

「何処に座る？」

「適当でいいと思うよ」

わたしたちは最前列中央の椅子に座った。ここなら一番話を聞きやすいと思ったからだ。幸運にして、この席に座っている『森の人』はいなかった。

——と、演台のそばに一人の老人が立った。どこかで見たことのある顔だったけれど、誰だったかまでは思い出せない。そこから少し離れた場所に、若い男の人が立っている。

「今日の講師『森の守護者』のソト様です」

そうだ。ソト様だ。前にテトさんに魔法で顔と名前を覚えてもらったんだ。覚えておいて損はない、とそのとき言っていたけれど、なるほどこういうことか。ソト様はわたしたちに一礼して演台に立った。腰が曲がっていて、顔にも深いしわが刻まれている。しかし、否定することのできないほどに強い存在感が、確かにその『森の守護者』ソト様にはあった（『森の人』になって階級——『森の子』、『森の人』、『森の守護者』、『森の王』の四段階——による礼儀が重視されるようになった）。

「集会の開催が遅れてしまって申し訳ない」

そう言ったソト様の声は、見かけからは想像できない、強く活力に溢れた声だ。わたしたちは、一礼してソト様の声に耳を傾ける。

「本日集まってもらったのは、魔法と諸君ら『森の人』の役割について、だ」

ソト様はそう言って、会場内を見渡した。

「——魔法は我々が使うことのできる、最も偉大な力だ。これは使い次第で何にでもなる。諸君らには、最善の使い道を選んで欲しい。森のため、諸君ら『森の人』のため、そして『森の子』のために」
ソト様は一息ついて、続けた。

「決して間違った使い方をしてはならない。歴代の『森の王』が定めた禁術である、『破壊』の魔法、『命』の魔法、『時』の魔法、これらは決して使ってはならない。また、イメージから創り出した場合であっても、それは同じである。これは森の安定と世界の泰平を守るためである」

突然、会場にどよめきが走った。わたしは驚いて、後ろに振り返る。ネルも同じのようで、後ろを見た。

「ふむ。その手を挙げている者、何か質問なのかね？」

会場のほぼ中心に座っている一人の『森の人』が、手を挙げている。その『森の人』立ち上がって言った。

「その三つの魔法はどうして、禁術となったのでしょうか」

『森の人』の視線が、ソト様に集まった。ソト様は「ふむ」と頷いた。

「それはな、世界のルールに反するからだ。『破壊』の魔法は、神と『森の王』が創り守ってきた自然を文字通り破壊し、『命』の魔法は各生物各個の治癒力を無視して傷を癒し、最上級魔法まで至ると、死者をも蘇らせる。『時』の魔法は一定した時の流れを乱し、さらには時空を超えてしまう力を持っている。これは、世界と神に対する冒涇だ。まあ、禁術になったきっかけがあるのだが、それはまたの機会においておこう。諸君らが生活していくうちに、おのずとわかるだろう。そして、この三つの魔法の危険性に気付いた歴代の『森の王』が禁術に指定したというわけだ。……質問の答えになったかね？」

質問をした『森の人』は「はい」と答えて座った。わたしには「きっかけ」が気になったけど、それは聞いても答えてくれないだろう。

「ふむ。では、次は諸君ら『森の人』についてだ。『森の人』には三つの役割がある。一つ目は、魔法の鍛錬をすることだ。それは結果として、森のためになるのだ。何度も言うが、決して悪しきことに使うことのないようにしてもらいたい。二つ目は、『森の子』を

守ること。魔力に『耐性』の無い『森の子』は、諸君らの知つての通り魔法が使えない。自衛の手段が無いのだ。そこで、諸君らに『森の子』をゴアビーストの脅威から守って欲しい。『森の守護者』もいるが、彼らはなにぶん忙しくてな。わたしもそうだが、森かなはなれることも間々ある。それに、森も魔力の制御もある。諸君らも大変だと思うが、協力して欲しい。最後は、エステア湖に天花を捧げることだ。各自毎日一本を捧げるように。天花は森の魔力を吸って成長し、自らも魔力を作る。そして、繁殖力も強い。毎日捧げても、無くなることは無い。森が滅びるまでな」

森が滅びるまで。

まるで滅びることが予想されているような、そんな言い方だ。こんなにも健康的な森が滅びるなんて、わたしには想像もできない。

「ふむ。まあ、余談だが……」

ソト様は『森の人』や森のあるべき姿やこれからの指針に触れながらも、あまり関係のない話を語った。

ソト様の集会が終わり、わたしたちは聖堂を出た。外の新鮮な空気が気持ちいい。

「特に新しい収穫は無かったね」

隣でのびをしているネルに言った。

「そうだね。まあ、禁術があるつてのは驚いたけど」

ネルはわたしの方を見ず、森の奥を見ている。わたしもネルの向いているほうを見てみたけど、特に何も無かった。

ネルはそのまま歩き出した。わたしもそれに続く。

「そういえばさ」

ネルが呟くように言った。

「うん」

「『森の守護者』って何処で生活してるんだろ？それに、ソト様くらいにしか会ったこともないんだけど」

「そういえばそうだね。どうしてるんだろ。人数が少ないから会い

にくいのは不思議じゃないけど……」

実際、わたしたちが『森の人』になって三十日くらいになるけど、今日の集会までに一度も『森の守護者』に会ったことも、見かけたことすらない。住んでいる場所が『森の人』と違うのはわかるけど、けど、ほかに魔力の濃い場所をわたしは知らない。

「うん。それに、実在するかも疑わしいよ」

「実在はすると思うよ。だって、『森の王』は『森の守護者』から選ぶ決まりだもの。それに、さっきのソト様が『森の守護者』じゃない」

わたしは言っただけど、ネルは頷かなかった。

「確かにそうだけど、もし決まりが、ソト様のその肩書きが、そもそも嘘だったら？」

「嘘？」

こくつとネルは頷いた。

「でも、そんな嘘って意味あるの？」

ネルはしばらく黙っていたが、やがて首をゆっくりと振った。

「まあ、ボクも確証があって言ってるわけじゃないし。今言ったことも、言ってしまうえば暇潰しだよ」

「暇潰し……？」

「うん。だって、森の生活って退屈だと思わない？」

第二章 空に星の光る日々―4（前書き）

第二章第四部です。

コメントが思いつきませんね。無理に書かなくてもいいんでしょうけれど。

文章が読みにくいか、そういうのあったら言うてください。
どうにかこうにか頑張ってみます。

（どう読みにくいかも同時に書いてくれるとうれしいです）

第二章 空に星の光る日々―4

わたしは天花をエステア湖にお供えした後、あの場所に向かった。
『星昇る夜』の前夜、ネルと語り明かした場所。

その場所は、木が生えていない。この場所に生えるのを拒むように、円形に木が生えている。誰もここには用事も無く、人は殆ど近寄らないけど、わたしにとってこの広場は、大切な場所だ。前夜はもちろん、つらい時や何かを決めた時、怒った時や泣いた時、いつもここに来た。わたその全ての思い出を、この場所は知っている。
「暇潰し、か……」

数日前にネルが言った言葉。でも、わたしはこの森の生活が退屈だとは思わない。ネルは何が不満なんだろう。

チチチチチ。

鳥の鳴く声が聞える。

カラカラカラ。

虫の鳴く声が聞える。

チャポン。ピチャツ。

水の爆ぜる音が聞える。

時折、獣の声も聞える。

森は平和で事件も起きず、平穏な時間が流れる。退屈だとは、わたしは思わない。事件も何もいらぬ。

わたしは、静かにネルと共に生きたい。

「これが……ネルにとっては退屈なのかなあ」

わたしの呟きを聞く人など、もちろんいない。ごろり、と横になった。昨日降った雨で、地面が濡れている。湿った土のにおいが、わたしの鼻を刺激した。懐かしいような、悲しいような匂いがする。考え事をしているときにここにくると、いつもこの匂いがする。思えばわたしは、この匂いで心が整理されていた――ように思う。けれど、今のわたしの心は、整理されない。

些細なことなのに、些細なことじゃないような気がする。
何かが変わる気がする。

「ダメダメッ！ 別に何も変わってないじゃない。ネルもわたしも」
まあ、ネルは少し口数が増えてきたけど。でも、本質的には何も変わってない。

わたしは体を起こして、そのまま立ち上がった。背中と頭が濡れてしまったけど、今のわたしには心地よく感じられる。後ろ髪を一回払い、わたしは広場を出た。

木が生い茂り、陽の光が遮られる。枝と葉の間をぬって差し込む陽光が、線になって地面を照らしている。湿った地面が光を反射して、きらきらと光っている。ネルの『発光』の魔法、『明滅する時』を思い出す。光り方は全く違うけど、なぜか思い出した。

急に、胸が締め付けられるような感覚に襲われた。
痛くはない。

ただ、苦しい。けれど、呼吸は普通にできている。
寂しい。

両手に魔力を込めて胸の前で握る。そして、ゆっくりと開けた。

「ピイ」

小さな白い鳥が一羽、わたしの手から出た。鳥はぱたぱたと羽ばたいて、わたしの肩にとまる。

「ピイ」

一度鳴き、また飛んだ。今度はわたしの指先にとまって、首をしきりに動かしている。その動きがとにかく可愛らしくて、わたしは鳥の頭を撫でた。鳥は気持ちよさそうに目を細め、また飛んだ。わたしの肩の上にとまり、首を動かしている。

わたしは思わず笑い、再び歩き出した。いつもより多めに魔力を込めて創ったこの鳥。たぶん、普通より長い間わたしの隣で鳴いてくれるはずだ。

「『小さな友達』、か」

この魔法の名前、確かにその通りだ。

この名前がますます好きになった。

「おや、ミナではないか」

突然わたしを呼ぶ声がして、わたしは上を見上げた。

「テトさん」

テトさんは、『森の人』となつて引越してきた家の住人だ。今はこの人と二人暮らし。話し方は男の人みたいだけど、女の人。

「天花を供えに行つたつきり帰つてこないから、すこしばかり心配していたのだよ」

テトさんはそう言つて、木から飛び降りた。バスンツ、という音がしたけど、当然、テトさんは平気そうだ。

「どうしたのかね？こんな所で」

「いえ、少し散歩してただけです」

「そうかそうか。……嘘はいけないよ」

テトさんはニヤニヤと笑い、その手をわたしの肩に乗せた。白い鳥は慌てて飛び立ち、反対の肩に乗る。

「おや？ 可愛い鳥じゃないかね。『発現』の魔法かね？」

「は、はい」

そうかそうか、とテトさんは何度か頷いて、またさっきのニヤニヤ笑顔に戻つた。

「さっきの話だが……嘘はいけないよ」

「えっ？ 嘘なんてついてませんよ」

けれど、テトさんは首を横に振つた。

「いやいや、嘘を言っているよ。実にわかりやすい。君は嘘をつける人間じゃないんだよ。君は嘘をつくことに対して自覚的かどうかはともかく、罪悪感があるのさ。別に、責めるつもりは無いよ。悩みあるなら、相談くらい乗るが？」

ニヤニヤした笑いが、今度は真剣な顔になった。考えてることがよくわからない人だ。

「……大丈夫です。テトさん」

一瞬、話そうかと思つてしまった。でも、これはわたしが解決し

なくちゃいけない問題だ。

「そうかそうか。ならばいいよ。いつでも気が向いたら話すといい。私たちは家族なのだから」

そう言つて、テトさんはどこかへ跳んでいった。取り残されたわたしは鳥の頭を撫で、また足を進めた。

「ピー」

鳥が鳴いて、わたしの視界の少し上を飛びはじめた。ゆっくりとわたしの歩調に合わせて。

「家族なのだから」——テトさんのその一言がわたしはうれしい。今まで勝手に一人だと思っていた。寂しいと思っていた。けれど、わたしにはちゃんと頼れる人がいた。頼るかどうかは別だけど、いてくれることはうれしい。

と、わたしの前を飛んでいた鳥が光りだした。

「あ……」

鳥はふわりと形を崩し、光の泡となって消えた。魔法の効果が切れたのだ。

「ありがと」

眩き、その場から離れた。

第二章 空に星の光る日々―5（前書き）

第二章 五部です。

なんだかんだ言いつつも、書いていけるななんて思います。

第三章までは少しかかりそうです…

第二章 空に星の光る日々―5

本当に何もすることが無くなったわたしは、とりあえず家に帰ることにした。

「ただいま」

家に入って、自分の椅子に座る。テトさんはまだ帰っていないようだ。

「よいしょっと」

外からテトさんの声が聞えた。

「ミナちゃん、いるかね？」

テトさんがわたしを呼んでいた。

「はい」

わたしははしごの下にいるテトさんに顔が見えるように、穴から顔を出した。今の家は、比較的狭い家だったりするのだ。

「すこし手伝ってくれないかね」

そう言ったテトさんの足元には、すこし大きな箱があった。

「わかりました」

わたしが下に飛び降りようと足を出そうとしたとき、

「そうかそうか。……ああ、やっぱり必要ないよ」

突然笑い、そして言った。

「え？ 大丈夫なんですか？」

わたしが思うに、あの箱を持つてはしごを上るのも、近くの枝に飛んで、こちらに入ってくるのも、できない気がする。

「大丈夫さ」

テトさんはそう言って、箱の上に両手を置いた。

「ちよっと、そこ開けてくれないかね」

「は、はい！」

わたしは慌てて家の中に体を戻した。

「荷物が届いたら受け取ってくれたまえ」

「はい」

わたしは不思議だった、すぐに疑問はなくなった。
箱が、穴の前で浮いていた。

「さあ、中に入れてくれたまえ」

わたしは箱を手に取り、中に入れた。ずしりと重かった。

テトさんの中に入り、わたしの向かいの椅子に座った。

「すっかり魔法の存在を忘れていたよ」

「わたしもです」

くすくすとテトさんは笑う。『浮遊』の魔法だ。テトさんは『森の住人』の中でも魔法の技術が高いと、他の『森の人』から聞いている。

「アレだな。魔法を知りすぎるもの問題だな」

ふう、と溜息をつきながらテトさんは言う。

「えっ？ どうしてですか？」

たくさん知っていたほうが便利そうなのに。

「使わない魔法は存在を忘れるだろう」

……一回言ってみたいせりふだ。けれど、今のわたしにはまるで自慢のように聞える。

「……ところで、その荷物って何なんですか？」

テトさんが突然持ち込んだ荷物を指して、わたしは言った。テトさんはそれを一瞥し、くすりと笑った。

「秘密だよ」

「えー、なんですか？ 教えてくださいよ」

「私たちくらいの仲でも、ミステリアスな部分があったほうが楽しいではないか。アレはそういうものだ」

あなたは存在がミステリアスです。言いたかったけど、心の中で呟いた。代わりにもう少し粘ってみる。

「ヒントを！」

「そうかそうか。ヒントが欲しいか。ふむ……」

テトさんは俯いてしまった。そしてすぐに顔を上げた。

「そうだな。使い方しだいで良くも悪くもなる、素晴らしいものだ」
それはほとんどのものが当てはまらと思う。

「もう少し」

「ふむ。それは無理な相談だ」

そう言つてテトさんは立ち上がり、箱を持っていつてしまった。
使い方しだいで良くも悪くもなる素晴らしいもの。そんなもの、
ほとんどのものがそうじゃないか。ヒントじゃない。回答が無限に
ある問題だ。

あの箱には何かある。

けれど、確かめることはしてはいけない気がする。それをすれば、
何かが壊れてしまう気がした。

「テトはおるか」

外から聞き覚えのある声が聞えて、わたしは外に出た。

「あつ……」

そこに立っていたのは、ソト様だった。

「ソト様。こ、こんにちは」

ソト様は薄く笑った。

「テトはおるか？」

「は、はい！ 少々お待ちを。どうぞ、上がってください」

わたしは慌てて奥に行き、テトさんと呼んだ。

「テテテテ、テトさんっ。ソト様がテトさんに御用だと」

テトさんは面倒くさそうにうなずいた。

「ソトか。わかった。上がって待ってもらっていてくれ」

「は、はい」

テトさんはソト様をそういう風に呼び捨てて呼んだ。わたしが知
らなかっただけで、テトさんは偉い人なのかもしれない。『森の守
護者』のソト様を呼び捨てにするくらいだから。

わたしが数歩歩いたらそこはもう、玄関兼リビングもどきだ。

わたしがそこに顔を出すと、ソト様は当然のように座っていた。
集会のときと同じ、強い存在感があり、座っているその場所がわた

しの立っているこの場所とは別世界のように思える。

「テトは……？」

「少々お待ちください。今、手が離せないみたいなので」

少し慣れてきた。いや、それよりも、なぜここにソト様が？ テトさんにどんな用事があるのだろう。

「そうか。ふむ」

ソト様はゆっくりとうなずいて、じっとわたしを見た。

「あ……あの、なにか？」

あまりにずっと見ていて、わたしは居心地が悪かった。

わたしが言うと、ソト様は我に返ったように「あつ」と声を上げた。

「すまん。つい癖で君の魔力の高さを測ってしまった」

『森の守護者』くらいになるとそういうこともできる、らしい。

初めて知ったが、やっぱり凄い。

「は、はあ」

とりあえず、返す言葉が思い浮かばなかった。曖昧な返事を返す。

「ふむ。見たところ新人にしては高いようだな。それに魔力が澄んでいる。……どうだね、今度の『星降りの夜』の儀式に参加してみぬか」

戸惑うわたしを気にもせずソト様は続ける。それにしても、『星降りの夜』の儀式とは……。

間違いない。それは『森の守護者』になるための儀式だ。『星の欠片』とエステア湖の水の魔力が反応し、強大な魔力が発生する。参加者はその間、湖に向かってただひたすら祈る（祈ることに対して意味はないそうだが、神聖な儀式なのでそうするらしい）。魔力はその祈る人の中から、数人の強い魔力を持つ人に流れ込む。そして選ばれた人がその魔力の波動に耐え抜いたら、はれて『森の守護者』の仲間入りを果たす。途中で魔力を解放すると失敗。

という儀式らしい。人から聞いた話だから、前みたいに間違いないかもしれない。

「わたしが、ですか？」

確かにいずれ参加する予定だったけど、これほど早く、『森の人』になったばかりで参加するとは思わなかった。少なくとも、一年は間を空けておく予定だった。

「そうだ。まあ、参加は自由だ。それに君は若い。まだまだ時間はあるのだからな」

そう言われると参加してみたくなくなってしまふのがわたしだ。ネルに報告して、一緒に参加するとうしよう。あつ、でも成功するかどうかは魔力量が関係するんだっけ。あゝ、だったらネルがいたら絶対にわたしには魔力は流れ込まないだろうな。

「待たせてすまないね」

後ろからテトさんの声が聞えた。わたしは振り返ってテトさんを見る。ソト様はテトさんの物言いを気にする事無く、いつもどおりの対応をした。

「ふむ。突然来たのは私だ。時間は大丈夫かな？」

「仕事の話じゃなければ大丈夫だが」

テトさんは真面目な顔でそう言った。しかし、ソト様は薄く笑っただけだった。

「仕事の話だ。……すまないが、席を外してもらえるかな？」

ソト様がわたしを見て言った。

「はい。それじゃ、テトさん。しばらく森の中うろついていますね」

テトさんはうなずいて応え、椅子に座った。

わたしはすぐに外に出て、地面へと飛び降りた。

「暇だわ」

そう、暇だ。別に家にいてもすることないけど。

とりあえず歩いてみよう。わたしは目的地を定めずに歩き出した。

『森の人』になつてしばらくたつけど、魔法はそれほど上達していない。上達したのは『小さな友達』だけだ。『色彩』の魔法だつて、まだ手を出していない。ネルには悪いと思ってる。けど、わたしにはまだそれを使う勇気がない。

使えないことが、怖い。

使えることも、怖い。

もし成功してしまったらわたしの魔法が完結してしまう——そんな思い。

できるかどうかは問題じゃなく、結果がどうあれ、『色彩』の魔法が、わたしの魔法の全て。そういう風に思う。原点であり、目標で、終わり。

そこからまた始まる——そんな考え方は、わたしにはできない。ただただ、恐れる。

馬鹿らしいと自分でも思う。けれど——。

「やあ。久しぶり」

突然声が聞えた。わたしは声がした方を見る。

「ネル……」

ネルはわたしの顔を見ると、表情を曇らせた。

「どうしたの？ 悩み事？」

久しぶりのその声は、優しく静かだった。

「ちよつと、ね」

「相談くらいのもよ？」

そう言われても、絶対に君は気にしてない。いつでもいい。ってそう言うに決まってる。

「わたしの悩みは——。」

「魔法のこと？」

「——っ」

心中を当てられ、わたしはネルを見た。ネルは得心したといわんばかりにうなずいた。

「たしかに、『色彩』の魔法は見たいよ。でもね、ミナがまだ練習したいって言うなら、ボクは待つよ。心配する必要なんでないんだ。気に病む必要もね。納得できたときに見せてよ」

どうして。どうして。

「どうして？ どうして？」

「うん？ 何が？」

「どうしてわたしの考えてることがわかるのよ」

怒ったような言い方をしてしまった。けれど、ネルは少し笑った。
「なんとなく、だよ。ミナの考えてることはなんとなく、わかるんだ」

「ごめん」

「何を謝ってるの？」

「わたし……」

言ってしまったのか。練習なんかしてないって。そしたら……ううん。なにも変わらない。なにも。

「ううん、なんでもないわ。……ねえ、ネル」

「なに？」

「ちよつと話、しょうか」

「いいよ」

一瞬の間もなく、ネルは答えた。

第二章 空に星の光る日々―6（前書き）

第二章第六部です。

今回、少しネルくんバトルをしてもらいました。

いちいち魔法の名前を言うのはどうだろう……なんて思いながら。
バトルパートの文章って、実は苦手です。

第二章 空に星の光る日々―6

誰しも第三者には聞かれたくない話はあるもので、そのときわたしはネルと話した内容はそれに当たる。だから、あえて語らない。たぶん、必要もない。

七日ぶりの再会。わたしとネルの、いつもの集会所。木々のない、あの広場。話すこともお互いに尽きて、沈黙が訪れた。

わたしは必要もないのに会話の糸口を探す。『森の子』だったときは、沈黙のほうが多かったのに『森の人』になってネルがよく話すようになってから、わたしは沈黙が怖くなった。

「ねえ、ネル」

わたしはようやく見つけた話の種をネルに向ける。

ネルは返事をしないで、空を見つめる。星が、輝いている。聞えてる？

こういう態度には慣れていたはずなのに、今は無性に不安になってくる。

「ねえ」

「聞いてるよ」

そう、優しい声が言う。

「わたしさ、『星降りの夜』の儀式、参加しようと思ったんだ」
返事があつて、わたしは安心した。

「……そう」

「ネルも一緒に出ようよ」

ネルは考え込むように、空を見上げた。
じつと、ネルが答えてくれるのを待つ。
沈黙が怖い。

「そうだね。……しばらく考えてみるよ」

ネルがわたしを見て微笑んだ。

わたしは言葉を続けられず、笑顔を返した。

話題が尽きた。

もう慣れなれている——はずだった。

わたしは気まずくなくて、うつむいた。ネルは再び空を見上げた。と、森の空気が震えた。

何かがおかしい。

さっきまでとは決定的に違う。ネルも気付いたのか、さっと立ち上がり、辺りを見回している。わたしも立ち上がって同じように森を見回してみた。

「森が……騒いでる」

ともすれば聞き逃してしまいそうな、そんな声でネルが呟いた。

「え？」

わたしにはハッキリとは聞えず、聞き返す。けれど、ネルは二度は言わなかった。厳しい目で森を見つめ、何かを感じている。

「えっ？ わあ」

突然わたしの腕を掴み、走り出した。

「ちよつと、きゃっ。どうしたの？」

普段なら絶対につまずかない小石につまずきながら、わたしは聞いた。

「『森の子』が——危ないかもしれない」

そうネルの声は、聞いたこともない、ケンカするときでさえ聞いたことのない、怖い声だった。

エステア湖から離れた場所。『森の子』の居住区。わたしたちは全力でここまで走ってきた。ネルが立ち止まり、わたしは聞きそびれていた質問をした。

「はあ……はあ……ネル、『森の子』が危ないって」

いくら走りなれていても、さすがに息切れはする。ネルもそれは同じだった。

「森が……騒いでた。……、それに、ゴアビーストの魔力も少し感じたんた」

ネルはそれだけを言って駆け出した。わたしも慌てて追いかける。ゴアビースト。この森に住む、わたしたちとは違う種族。魔力が強くなったときに動きが活発になるけど、それは普段は活発じゃないってことじゃない。彼らも生き物だ。活動は常にする。

けれど、これは予想外だ。わたしは、ゴアビーストと戦えるような魔法を持っていない。まともな魔法は『小さな友達』だけだ。ソト様は魔力が高いと言ったけど、魔法は下手だ。

ネルはどうなんだろう。

「ネル！ゴアビーストに対抗できる魔法なんて、使えるの？」
走るネルを追いかけながら、わたしは聞く。

「通用するかはわからないけど」

それきり、何も話さなくなった。いや、話せなくなった。

悲鳴が、聞えた。

「こつち！」

ネルが急に方向を変える。わたしはつまずいてバランスを崩した。ネルはどんどんと先に行ってしまう。わたしは慌てて立て直してネルを追う。

悲鳴の発生源。

それは、サトナだった。

「サトナ！」

思わずわたしは叫んでいた。サトナは一瞬こちらを向き、そして走ってきた。

「ミナア！」

こちらに走ってくるサトナの後ろ、そこには一匹のゴアビーストがいた。

「グルルルル」

ゴアビーストの唸り声が聞えた。

「サトナちゃん、早く！」

ネルが叫ぶ。サトナは歯を食いしばり、こちらに飛び込んだ。
「ミナアアアア！怖かったよおっ！」

わたしはサトナを抱きしめながら、ゴアビーストと対峙するネルを見た。突然現れた邪魔者に、ゴアビーストは威嚇の動きを見せた。

「……ネル」

「大丈夫。サトナちゃんを頼んだよ」

「うん……」

ネルは両手を下げたまま、足を肩幅開いて立っている。その両手は魔力で温かい光を放っている。

「グルル」

じりじりと、ゴアビーストがネルとの間合いを縮める。ネルはただ、視線をゴアビーストに向けている。わたしから見たら、ネルは隙だらけだ。

「帰れよ」

静かな、けれど、有無を言わさぬ声が聞えた。その声がネルから発されたのだと気付くのに、わたしは時間がかった。

「お前らさ……邪魔なんだよ」

それが開始の合図だった。ゴアビーストがネルに飛びかかる。ネルはただ左手を伸ばし、その手のひらをゴアビーストに晒しただけだ。

思わず目を閉じてしまった。

バンッ！ という大きな音が聞えて、ゆっくりと目を開ける。

ネルが、立っていた。

「どうして……？」

わたしが目を閉じるその前と同じ姿勢で、ネルは立っている。ふと思い、ゴアビーストをみると、少し離れた場所で、殺意がこもった視線をネルに向けていた。

「帰れよ」

ネルが言う。しかし、ゴアビーストはじりじりと間合いを詰め始めた。

「ミナ」

その怖い声のまま、ネルはわたしを呼んだ。

「は、はい……」

思わず敬語になってしまう。

「ゴアビースつてさ、殺してもよかったっけ？」

表情は見えないけど、その背中とても怖い。わたしは知識を総動員して、その質問の答えを探す。

「あの…… 正当防衛なら」

たしか、昔の『森の王』とゴアビーストの王がそういう取り決めたそうだった。いわく、『互いに両者を傷つけない。ただし、一方が攻撃を仕掛けてきた場合には迎撃者は、その限りではない』。今は、その王もおらず、この取り決めの影響力も弱まっているけれど、そうであったとしても、今の状況は、わたしたちは迎撃者に当たる。どう転んでも、とりあえず自分たちの正当性をアピールできる。

「つまり——」

ネルが、異常なほど冷たい声で言う。

「問題ないってわけだ」

目の前のネルが、わたしの知らないネルになってしまったような気がした。

ネルが伸ばした左手に魔力をさらに込める。それに比例して、光も強くなっていく。

「グルルル」

ゴアビーストが唸る。

「黙れよ。耳障りだ」

ネルが、左手に魔力を込める。

「拘束の魔法『光子の環』」

わたしの知らない魔法だ。ネルはわたしよりもずっと、進んでいる。

左手から、魔力が放たれ、ゴアビーストの体を囲んだ。

「ガアッ」

魔力から逃れようと跳躍するが、それをネルはあざ笑うかのように、「ふん」と笑う。

「防壁の魔法『光子の盾』」

本来身を守るための魔法を、跳躍したゴアビーストの頭上に発動する。

バンッ！という大きな音がした。たぶん、さっきの攻撃もこれでのいんだ。

地面に落ちたゴアビーストの胴体と腕を、『光子の環』が囲む。それだけでゴアビーストは動けなくなった。足にも、同様の魔法を、こちらは小さな環が囲む。

「グルルル！ガアアアア！」

身動きができなくなったゴアビーストが唸る。

ネルは不機嫌そうに首を傾けた。ゴキッ、と首のなる音がして、わたしは思わず身を震わせた。

このネルは、わたしの知るネルじゃない。

今この場に限っては、絶対に。

「耳障りだ」

もう一度言って、不機嫌そうに目を細める。

ネルが両手を合わせ、それから少し両手の間を開けた。

「断罪の魔法『光子の剣』」

ゴアビーストに右の手のひらを晒し、左の手で右手を押さえる。

ゴアビーストを取り囲むように、ドーム状に光の剣が現れた。

「ミナ。サトナちゃん」

ネルはこちらを見ずに、背中と言った。

声は、優しかった。

「目、閉じたほうがいいかも」

「う、うん」

わたしは、ネルが何をしたいのかがわかった。わたしの懷で泣くサトナの目を手でおおって、わたしも目を閉じた。

「お前が……いけないんだ」

そう、ネルが呟いた気がした。

「ガッ……」

一瞬、ゴアビーストの声が聞えた。だが、一瞬だ。ザリ、ザリ、と、足音が近づく。

「終わったよ」

ネルだ。その声はいつもどおりの、優しく静かな声だ。さっきのネルが幻のように思えてくる。

「帰ろうか」

「うん……サトナ、帰ろう」

「……うんっ」

サトナは一人で帰れるから、とその場でわたしたちと別れた。思ったよりもしつかりとした足取りだったので、わたしたちは安心してわたしたちの移住区に戻ろうと歩き出した。

さっきゴアビーストと戦っていたネル。

思い出すだけでも怖い。帰っている今でさえ、話しかけるのをためらってしまふ。目の前にあるその背中が、遠くにあるように思えてくる。近くにあつて、それでも遠い。

「しまった！」

突然、ネルが叫んだ。わたしは驚いて、後ろを歩くネルを振り返る。

「ど、どうしたの？」

ネルは答えず走り出した。もう、わけがわからない。

「ネル！ どこ行くのよ！」

慌てて追いかける。ネルは答えない。ただとても取り乱しているのがわかる。

「……どうなってるのよ」

呟き、そして今走っているこの道に見覚えがあることがわかる。

「……嘘」

嫌な予感がした。走る速度を上げる。先を走っていたネルを追いつき、その差を広げていく。

「ミナ！ キミが行って戦えるの？」

後ろからネルの声が聞えたけど、けれど、わたしは止まらなかつ

た。いや、止まらなかった。

景色が猛烈な速度で後ろに流れる。

「嘘だ！ 嘘だ！」

第二章 空に星の光る日々―7（前書き）

第二章第七部です。

そろそろ第二章も終わる気がします。

第二章 空に星の光る日々―7

「嘘だ！ 嘘だ！」

わたしは自分の予感を振り払うように叫んだ。

けれど、無駄な努力だった。

目の前に広がる光景が、わたしの心を絶望に染めていく。

「嘘だああああ！」

わたしの視線の先、廃れた巨木。

――わたしの家。

元は穴が開いていた部分に飛びあがる。枝やなにやらが上から落ちてきたらしいく、その穴は埋まっていた。両手を使って枝をどけていく。手にささくれが刺さる。血が出た。けれど、手は止まらない。止めない。

「×××××！」

何を叫んだのかは、自分でもわからない。気付けばわたしは両手で枝を押さえつけ、魔力を込めていた。

「――ッ！」

今度は何も言っていなかったと思う。ただ声にならなかっただけかもしれない。枝が吹き飛び、穴の中や外にはじけ飛ぶ。

「コズ！ ハギ！」

穴に飛び込み、いるはずの二人を探す。けれど、返事は無かった。中を探してもいなかった。

「どこよ」

わたしは外に出て、地面へ飛び降りた。

「ミナ！」

やっと追いついたネルがわたしを呼んだ。

「二人がいない！」

それだけ言って、わたしは駆け出した。

どこ？ どこ？ どこ？ どこ？ どうどうどうどうどう！

最悪の状況が頭に浮かぶ。

ざわり。

異質な魔力の流れを感じた。流れ、というよりも、波動といったほうが適切かもしれない。とにかく、異質な魔力を感じてわたしは方向転換をした。

異変を見つけるため周囲を見回しながら走る。少し離れた場所で寝るが走っていくのが見えた。と、ネルが飛び上がり、木の枝に乗った。そして次々と飛び移りだした。わたしは構わずそのまま走り続けた。

うれしいことにわたしたちの向かう先に、ハギとコズはいた。けれど、状況がうれしくなかった。

泣くコズを抱いて、太い枝を持ってゴアビーストと対峙するハギ。体のあちこちに怪我をしている。

「はあ……はあ……」

ハギの乱れた息が聞える。けれど、わたしはその場から声を出すのはもちろん、魔法で助けることすらできない。声を出せばコズとハギが、魔法を使えばわたしが、確実にヤツの攻撃を受ける。最悪、死んでしまうだろう。それほどに、拮抗した状態だ。

「拘束の魔法『光子の環』」

わたしの頭上から、あの冷めた声が聞えた。いや、さっきよりはまだ熱がこもっている。……あつてないようなものだけれど。

突如として現れた光に、ゴアビーストは反応できなかった。あっさりと拘束される。

「ハギ！ こつちに早く！」

目の前の状況に驚いていたハギがこちらに気付き、走ってきた。コズはハギの服をぎゅうつと握り、声を上げずに泣いている。

「再会を喜びたいトコだけど、そういう雰囲気じゃないな」

「そうみたい」

コズは微笑み、わたしは笑った。

「ネル！」

わたしはそれだけを叫んだ。こくり、とネルが頷いたのを確認して、手当てをするために離れた場所へ移動を始めた。

後ろから、「おおおおっ！」という、ネルの雄たけびが聞えた。わたしたちは振り返らずに進む。大きな木があり、そのしたまで歩いたところで、ハギはコズをおろして、ドサツと崩れるように座り込んだ。

「ミナ？ ハギは大丈夫なの？ ねえねえ！」

コズが泣きながらわたしに訴える。

「大丈夫だよ。コズ、ちょっとここでハギと待っててね」

コズの頭を撫でながら、出来る限り穏やかな声で言う。

「……うん。わかった」

わたしはその場を離れ、地面に生えた草を探る。薬草を探すためだ。この森には薬草になる草は多いし、そういう木も多くある。

地面を四つんばいで進み、一本も逃さないように探す。

雑草。雑草。花。花。石。雑草。雑草。

花。雑草。石。木。木。木。木。

木！

わたしは目の前の木を見上げた。

天高く上るその木は、なんと都合なのだろう。薬木だった。思いつき飛び上がり、木の枝に乗る。枝は太くしっかりしている。

手を伸ばし、手近な葉を十枚取った。

「急がなきゃ」

枝から飛び降りて、コズとハギの待つ場所へと走る。

結構離れてしまったと思っていたのに、案外近かった。四つんばいで進んでいたから、勘違いをしたんだろう。多分。

「あった？」

すでに戦闘を終えたネルがコズを抱いていた。

「うん。先にハギの手当てやっちゃうね」

「うん」

わたしはハギの前にしゃがみ、葉を一枚手ですりつぶし始めた。

「ありがとう」

笑顔でハギが言う。わたしもつられて笑顔になる。服を脱いで、上半身をわたしに晒す。胸や腹には特に目立った外傷は無かった。けれど、あざはいっぱいあった。

背中をわたしに晒す。傷は無かった。けれど、あざはいっぱいあった。

怪我をしていたのは、皮膚が露出しているところだけだった。わたしは小さく息をついて葉を手ですりつぶした。

「腕だして」

ハギは右腕をわたしに差し出した。その傷だらけの腕にすりつぶした葉を塗りこんでいく。

「つう……」

「はいはい。がまん、がまん」

続けて左手も同様に塗りこむ。足も傷がたくさんあった。よく大きな怪我をしなかったのもだと思う。

「よく怪我しなかったわね」

思ったことをそのまま口に出した。ハギは小さく笑う。

「怪我はしてるさ」

「大きな怪我、だよ」

「まあね。ミナやネルが着てくれるまでは、ずっと逃げてたから」
自嘲気味にハギが笑う。

「ハギさん」

不意に、今まで黙っていたネルが言った。ネルは昔から「ハギさん」と呼んでいた。

「なんだい？」

「どうしてヤツらが攻め込んできたのかわかりますか？」

ハギは悩みこむようにうつむいた。

「……よくわからない。気付いた時にはヤツらは僕の家に入り込んでいたよ。それからすぐにコズを担いで逃げてきたんだ。……そろそろヤバイなって思ってたら君達が助けてくれたってわけ」

「そうですか」

ネルは再びコズを頭上に持ち上げて、クルクルと回りだした。案外子供好きなのかもしれない。

「……あ、ほらハギ、足出して」

「あ、ああ」

伸ばした足にすりつぶした葉を塗りこんでいく。

「それにしても、この程度の傷なら魔法でどうにかできそうだけど……そういうのはないのか？」

不思議そうにハギがわたしに聞く。

「あるよ」

「え？　じゃあ……」

「でも、使っちゃいけないんだって。禁術ってやつらしいわ」

ハギは一瞬うれしそうな顔をして、すぐに表情を曇らせた。

「残念。でも、何で使っちゃいけないんだ？」

「さあ？　色々あるのよ、きつと」

自分でもわからないことは他人には説明できない。わたしは適当に説明にもならない説明をした。

「ふうん」

それ以上の追求は無く、わたしはそつと胸を撫で下ろした。

「コズ、おいで」

ネルにグルグルまわされているコズを呼ぶ。

「うん」

ネルは回すのを止め、コズを下ろす。

「あれえ？　目の前がぐるぐるしてるう」

足取りはフラフラしていて、それでもこちらに歩いてくる。ネルはそつと後ろから付いて歩く。

まあ、転んだ。しかも前に倒れたため、ネルも支えることはできなかった。服を掴むことも、腕を掴むことも、どちらもできなかった。まさか、後ろに流れた髪をつかむことなんてできないし。

「いったあい」

コズ以外のわたしたち三人が笑う。コズはすつと立ち上がって、体についた枯葉や土を払い落とした。

「で？なに？」

さつき転んだことなど無かったというように、何食わぬ顔で言う。そういうところがまた面白い。

「怪我してない？」

「うん。全然してないよ」

念のためにさつとコズの体を見ってみるが、たしかに怪我はしていなかった。ハギのおかげであることは考えなくてもわかる。

「さて、ゴアビーストのヤツが家の入り口潰したからな。コズ、帰って入れるようにしようか」

いつの間にかハギは立ち上がっていた。

「あ、それ、もうわたしが入れるようにしてるよ」

二人を探すときになんだかよくわからない魔法で。

「本当？」

「うん」

「そっか。ありがとう」

「いいのよ」

それから、どちらも何も言わず、気まずい沈黙に包まれた。

あ、コズの身長伸びてる。

「さて、コズ帰ろうか」

「うん」

「わたしたちも帰ろっか」

「そうだね」

と、コズがすこし寂しそうな顔をした。

「うちに寄っていかないの？」

コズにそう聞かれ、わたしとネルは顔を見合わせた。くすり、とどちらともなく笑い、コズにうなずいて答えた。

第二章 空に星の光る日々―8（前書き）

八部です。

これで第二章は終了します。

次回から第三章……お楽しみに。

第二章 空に星の光る日々―8

久しぶりの、我が家。いくら引越したといっても、コズとハギがいるこの場所が我が家であることに変わりはない。もちろん、テトさんと暮らす今の家も好きだ。

恵まれている。

二つも帰る場所があるのだから。

コズは本格的にネルに懐いてしまい、ネルは照れたように笑っている。

ハギは楽しそうにはしゃぐコズを見て微笑んでいる。

わたしは、そんなみんなを見て笑う。

こんな日々が続けばいいと思う。特に何かが起きるわけじゃないけど、けれど、こういう時間が幸せなんだと思う。

「見てなよ」

ネルがコズの頭を撫でながら笑う。

「ほら」

ネルが広げた両手の中から、一匹の森ネズミが現れた。小さな耳に、フサフサの毛。長い尻尾。愛くるしい姿だ。『小さな友達』だ。『かわいいー！』

滅多に見れない森ネズミの姿に、コズは大喜びだ。手の上に乗せて、そのフサフサの毛を撫でている。

「変わったな」

ぽつり、とハギが呟いた。それは、わたしに向けられた呟きだった。なんとなく言いたいことはわかった。

「ネルのこと？」

「ああ。前はあんなにしゃべらなかった」

「『森の人』になってからね、口数が増えたのよ」

「そうか」

そう言って、森ネズミで遊ぶコズを微笑みながら見つめるネルを

見る。しばらくして、ハギが呟くように言った。

「ちよつと見ないうちに……立派になったんだな」

「人は成長するの。遅かれ早かれ、ね」

「ミナにそれを言われるとはな」

クスクスと笑う。

わたしもつられて笑う。

そこへ、ネルがやってきた。コズは森ネズミと遊んでいる。たぶん、たくさんの魔力がこめられているのだろう。

「ミナ」

「うん？」

自然と、わたしたちの視線がネルに集中する。コズは気付いていない。

ネルは何かを決意した、そういう表情でわたしたちの前に立っている。

「どうしたの？」

「出よう」

「へ？ もう帰るの？」

どうやらわたしの見当違いだったようで、ネルは頭をかきながら苦笑した。ハギは怪訝そうな目でネルを見る。

「違うよ」

「えっ？ じゃあ……なに？」

「うん。ボク、『星降りの夜』の儀式に出るよ」

「えっ？ あ、うん！がんばろうねっ」

自然とその言葉が出てきた。けれど、今回に限っては、わたしたちはライバル。『星昇る夜』のように、自分のがんばり次第ではどうにもならないからだ。

「今日でよくわかったよ。ボクには力が足りない」

ネルは、思わず見とれてしまいそうな表情で続ける。

「ボクは力が欲しい。もっと、もっともっと」

そして、わたしたちを交互に見た。

森ネズミと遊ぶコズを見て微笑む。
「みんなを、守りたいんだ」

第三章 星降りの夜―1（前書き）

やっとこさ第三章に突入です。

星が空にある日々も終わりを迎え、星が空から降ってくる日を迎えます。

物語も中盤を迎えました。

第三章 星降りの夜―1

『星昇る夜』から今日で八十六日になる。もうすぐ訪れる『星降りの夜』。それまではお互いに合わないことを、わたしとネルは約束した。といっても、半ばわたしが無理やり取り決めたようなものだ。思えば心のどこかで、ネルに甘えていたような気がする。

自分の力で立ちたい。

わたしはそう思った。だから会わない約束をした。身勝手だとは思う。けれど、わたしはそうすることしか思いつかなかった。思いつく必要さえないようなことだったけど、思いついてもする必要のないことだけど、わたしは、やらなくちゃいけないような気がした。「不安かね？」

家の穴の外、少し離れた木の枝に座っていたわたしの隣に座り、テトさんが言った。

まだ日が出ていないような早朝で、いつもならテトさんは寝ているはずなのに。

「それは……、『星降りの夜』は『星昇る夜』よりも、強大な魔力が溢れますし……わたしなんて余波だけでも耐えられるかどうか……」

「そうかそうか。けれど、わたしが聞きたいのはそういうことではないのだよ」

「えっ？」

わたしの心を見透かしたようなテトさんの口調に、わたしは驚いてテトさんのほうを振り向いた。テトさんは優しい笑顔をわたしに向けた。

「私が聞きたいのは、ネルとかいったかな？ その少年と会えないことが不安なのか、ということなのだよ。『星降りの夜』は誰でもとても不安なことなのだからね」

「……」

「やはりそうかね」

テトさんは少しだけ表情を暗くして、わたしの隣に座った。

「私も何度か会ったことがあってな。不思議な子だったよ。落ち着いているようでいて、内側は何か強い思いが渦巻いていた」

わたしは黙って、テトさんの話の続きを待つ。わたしの知らないネルが、もしかしたらあの時のネルが、そこにはいるかもしれないと思った。

「魔力も高く、『耐性』もそれに見合うだけあった。けれど、彼はそれでは満足していなかったよ。もっと力が欲しい、そうわたしに言った。理由は聞かなかったが、よほどのことがあったのだろう。普通に笑ったつもりだろうが、何かを隠しているかのように、ぎこちない笑い方だったよ」

何が言いたいのか、わたしにはわからない。

「まあ、そのときはそれで別れたのだが、ああいうタイプのヤツは一人じゃ立つていられないだよ。なにかしらの支えが必要になるのさ」

テトさんはそこで言葉を切り、わたしの頭に、手を置いた。

「だから、君が支えてあげるといい。今君は彼に支えられていたと気付いているはずだ。そして、彼は君の支えを必要としている。こういうときに手を差し伸べられないのでは、女がすたるよ」

くしゃくしゃと頭を撫で、にっこりと笑った。

「それから、『星降りの夜』なんざ、ほとんどの人が失敗するのだよ。失敗したからといって落ち込む必要なんてない。成功したときだけ、喜びを全身で表せばいいのだよ」

テトさんはまた、わたしの頭をくしゃくしゃと撫でた。

荒っぽいけれど、優しくかった。

「テトさん」

「なにかね？」

「わたし、がんばります。ネルを支えられるように。喜びを全身で表せるように」

「そうかそうか。がんばるといい。努力は必ず実を結ぶのだよ。結果が出るか出ないかの違いだけだ。結果が出せるのは、真に強く願う人だけというだけ」

わたしは今まで、努力をしてきたか。

してきたと思う。結果は伴わなかったけど。

していいと思う。だから魔法だって、いまだに『小さな友達』しかまともに使えない。

真に強く願ってきたか。

願ってきたと思う。結果は出なかったけれど。

願っていないと思う。『星昇る夜』だって、ネルに甘えて、自分では立っていないかった。

これから、この二つができると思うか。

できる。わたしは、自分の役目に気付いたから。

『森の子』時代では、二番目の秀才。

この肩書きが、『森の人』になってからはただの重荷だった。けれど、今は誇りに思える。

「それでは」

テトさんはたつぷりと時間をかけてあくびをかみ殺して言う。

「わたしはもうひと寝入りしてくるよ。さすがにこれは朝が早すぎる」

「テトさん」

家の中に入っていくテトさん呼び止めた。テトさんはこちらに振り向いて、「なにかね」と答えた。

「ありがとうございます」

わたしの知らないあのネルには会えなかった。けれど、強いとばかり思っていたネルの弱さを知った。十分だ。

テトさんにはっこりと笑い、手をひらひらと振って、木の中に消えた。

格好の良い人だ。魔法も使えて、聡明だ。なにより、人の心がわかる。

「ありがとうございます」

わたしはもう一度お礼を言って、木から飛び降りた。

天花は、いつものように森の中に咲き誇っていた。純白の花弁に、深緑の茎。どこにでもありそうな花。けれど、おしべとめしべが、青い。花粉で黄色くはない。天花には、花粉が無い。魔力より生まれて、魔力を生み出す。青色は、魔力の色。

きれいな天花を二本摘む。昨日お供えできなかったから、その穴埋めとして。

手に取るだけでわかる。天花に魔力があることを。そして、それが圧縮されて制御されていることも。一体、この花にはどれだけの魔力があるのだろう。たぶん、わたしには制御できないのに違いな

い。
天花をエステア湖の湖面に浮かべる。すると、花は溶けて消え、目に見えない魔力も、たぶん、湖に溶けた。

なんて簡単な仕事だろう。けれど、なんて大切な仕事だろう。あまりにも楽で、面倒くさい。けれど、忘れてしまうと大変なことになる。

「『星降りの夜』、か」

『星降りの夜』。『森の人』でも一部の人が参加しない儀式。

わたしたちが受けるには、まだまだ早いと思わざるを得ない儀式だ。天花を湖に供えてしまうと、もう仕事はない。家に帰ろうか、と思ったけれど、少し気が変わった。

久しぶりに、やってみるのもいいかな。

「えっと……こんな感じでいいのかな」

わたしは一度見ただけの記憶を頼りに、頭の中で魔法をイメージする。対象は、あの木でいいか。手に魔力を込め、彼がやっていたように右の手のひらを木に向け、左手でその手を支えた。

「断罪の魔法『光子の剣』」

きちんとした魔法じゃない。イメージからの魔法だから、正確に

は『断罪の魔法』ではない。けれど、名前を言えばそのものになる気がしたし、完成度も高まると思った。

光の剣は、木の幹を囲み、ドーム状に展開する。しかし、剣はいくら待っても木を貫かない。もしかしたら、剣で貫くための動作があるのかもしれない。けれど、彼が使ったときに、わたしは目を瞑っていた。その動作を見ていない。

わからない。

「……どうしよう」

魔法を発動したままの状態で硬直するわたし。どうしようかと迷った拳句、右手を軽くしたに下ろしてみた。

何も起きない。

次に支えていた左手を離して、軽く振ってみた。

何も起きない。

右手を握ってみる。

その指の動きに連動して、剣が、木を貫いた。

急に体に疲労が押し寄せてくる。足に力が入らなくなり、その場に座り込む。

「はあ……、はあ」

息が乱れ、胸が苦しい。

それほどに、この魔法が魔力を喰う量が多い。正式な魔法ならもう少し少ないはずだが、それでも多いことには違いない。

これほどの魔法を、彼は二度も連続して使ったのか。いや、もしかしたら他に使っていたあの魔法も、同じくらい魔力を消費するのかもしれない。

わたしは、彼との力の差、いや、格の差を、思い知った。

家にのろのろとした足取りで帰り、そのまま溶けるように眠りについた。

気がつけば、太陽は東の空で輝いていた。

「きゃああああ！ ああああ、天花供えなきや！」

絶叫し、飛び起きる。わたしが眠ったときはたぶん、太陽は真上に近い場所だったはず。テトさんに励まされて……、寄り道しながら天花を供えに行つて……、魔法を使つてみて……、ナメクジみたいな足取りで帰つてきた。つまり、わたしは一日眠っていた！さらに慌ててどたばたしているわたしを、しかし、テトさんは笑つた。

「笑わないでくださいよぉ！」

テトさんは心底おかしそうに、くすくすと笑っている。

「いやね、なぜそんなに急ぐのかと思つてね」

「天花をエスティア湖にお供えしなきゃいけないんです！」

「そんな大切なことができずに眠っている家族がいるのに、何もせずに過ごすヤツがいると思うのかね？」

「えっ？　じゃあ……」

「無論、私がすでに供えておいた。まあ、半年に一回くらい、こういうことがあつてもいいだろう」

テトさんは、笑いならこちらに近づいてくる。

「ありがとうございます」

「なに、気にすることではないさ。臨機応変に対応ができてこそ、一人前だといえるのだよ。覚えておくといいよ。ミナ」

「はい」

「いやはや、昨日私が目を覚ましたら起きているはずのミナが眠っているではないか。一向に起きる気配が無いので、まさかとは思いつつも、早起きを覚悟し早寝をして、何とか目覚めた私は天花を供えたのだよ。早寝早起きなどクソ食らえ、さ」

表情は上機嫌だ。何を考えてるのかわからない人だ。けれど、この人と同居することになったことは素直に、よかったと思う。今日だけじゃなく、今までだつて、気付けばわたしの近くにいてくれて、何度も救われていたように思う。

「ま、たまにはいいがね」

笑顔を浮かべ、わたしの部屋から出て行つた。

……っていうか、この人一体どういう睡眠のとり方してるんだ
ろっ？

第三章 星降りの夜―2

わたしが『森の人』になり、テトさんと初めてあった日のことは今でも覚えている。劇的な出会いだったと思う。

その日、わたしは引越先を探すために（『森の人』になったら、自分たちで新居を探さなくてはいけない。一人暮らしをするか誰かと同居するかは自由）森の中を歩き回っていた。当初わたしはネルと一緒に住もうと思ったのだが、「『森の守護者』になるまで待つて」とネルに言われて断念。どうして『森の守護者』になるまで待つ、という条件なのかはわたしにはわからないけど、無理に頼み込むのも変だと思い、素直に引いた。

住居探しは楽ではなかった。ほとんど場合、定員一杯の人数で生活をしてきたからだ。一人暮らしの『森の人』に頼んでも、「一人のほうがいいんだ」なんて言って、断られる。仮に定員一杯でない家を見つけても、「これ以上は生活が窮屈だから」だそうで。二日間、野宿をした。一人暮らしは嫌だった。絶対に。

いい加減に引越し先を見つけないかと思っていたそのとき、寝ぼけているんじゃないかと思わせるほどに、とろんとした表情のテトさんがわたしの前に現れた。そして、わたしを見るなりこう言ったのだ。

「おや？ 君、新しい『森の人』かね？ 新居は決まったかね？」

「い、いえ……まだ、ですけど」

正直、関わりたくない人に関わってしまった。そう思った。

「そうかそうか。ならば家に来るがいい。一人暮らしで寂しいと思っっていたのだよ」

「えっ？ あ、ちよつと……」

強引にわたしの手を引き、少し歩いたところで立ち止まる。そして、木の上を指差した。

「あの穴が私の家。そして、今日から君の家でもある。……ところ

で、君、名前は？」

「えっ、ミナ、です」

テトさんの表情が一瞬かたまり、しかしすぐに先ほどのとろんとした顔に戻った。

「そうかそうか。私はテトという。さてミナ。上がりたまえ」

わたしが躊躇していると、テトさんは不機嫌そうにわたしを睨み、わたしの両肩に手を乗せた。

「ひっ」

「心配する必要は無い。私は女だ」

それは、胸のふくらみを見ればわかる。わたしが怯えていたのはそこではなく、初対面の人に強引に連れまわされているからだ。自分から話しかけて会話を進めるのとは、勝手が違う。

テトさんは大きな溜息をつき、邪悪に笑った。

「仕方がない。ミナ、君に魔法を使わせてもらったよ」

「えっ？」

気付けば、わたしの体は宙に浮いていた。なんとも言えない浮遊感に包まれ、わたしはさっきテトさんの指差した穴の中に進入した。床におろされ、すぐに出ようと立ち上がると、そこには最早テトさんが立っていた。

「ひいっ！」

悲鳴を漏らすわたしを、テトさんは不思議そうに見ていた。

「どうして私を恐れるのかね？行き場のない君を思っ、て、居住スペースを提供しよう言っているのに」

わたしはただ、誘拐されたと思った。

「まあ、初日で緊張しているのだろう。その奥の部屋が空いているから自由に使うがいい」

そしてテトさんはわたしを魔法で浮かせて、その部屋の中へと文字通り押し込んだ。

これがわたしたちの出会いなのだが、全く、とんでもない人である。

そして次の日、わたしは愕然とした。

「君は誰で、どうしてここににいるのかね？」

テトさんは怪訝そうな目を、わたしに向けていた。

事情を説明すると、前日は相当酔っていたらしい。とりあえず、一人暮らしが寂しいのは事実だったようで、あっさりと同居を許可された。

わたしは広間へ出た。外に出る穴も、この広間にある。広間。テトさんの部屋。わたしの部屋。三つの空間からなっている。

広間では、テトさんが椅子に座ってくつろいでいた。

「今しがた耳にしたのだが……」

「何がですか？」

「君とネルがゴアビースト二体を迎撃して殺したそうだね。いや、実際殺したのはネルだが」

「……」

その場から動かないわたしを、テトさんは手招きをして椅子に座るように促した。

「実際のところ、どうなのかね」

普段の会話と同じ、ある種どうでもよさそうな口調だ。

どうせ嘘を言ったところで、テトさんには通用しない。わたしは本当のことを包み隠さず全て話した。

「……そうかそうか」

話の途中、テトさんは一切口を挟まなかった。最後まで聞き終え、どこかうれしそうな顔で何度かうなずいた。

「もしかして、マズかったですか？」

不安になって聞いてみた。しかし、笑いながら手をひらひらと振った。

「いやいや、決してマズくなどないよ。むしろ敬意を表しようじゃないかね」

「どういうことですか？」

「その日のゴアビーストの出現は、君たち二人と、襲われた『森の子』以外誰も知らなかったのだよ。私たちが気付く前に君たちが解決した、ということだ。なにせ、その事実を知ったのは、『森の子』からの報告があったからなのだから」

「不可侵の掟を破りましたが……」

「先に破ったのは奴らさ。それに、奴らを殺したということは、迎撃者における『殺害の不問』という項目を知っていたからだろう」

「……はい」

「ほら。君たちは何も気に病む必要などないのだよ。事情を説明したら、ゴアビーストの長も不承不承ながら納得してくれたようだしね」

さすがに、不審に思えてきた。『森の子』からの報告があったことを知っているのは、まあいい。けれど、なぜゴアビーストの長が納得したこと知っているのか。そんな上級階級の人が知っていればいいことを。それに、今しがた耳にした、ということは誰かが報告に来たということ。同居人だから、という理由もあるだろうが、しかしわざわざ家までやってくるだろうか。むしろ、わたしが話したと思うほうが妥当だろう。

「テトさん」

「なにかね？」

「あなた、何者ですか？」

テトさんはじつとりとした目でわたしを見つめ、フツと笑った。

「ただの君の同居人だよ」

「『森の人』なんですか？」

「『森の守護者』がこんなところにいると思うのかね。いても不思議ではないが。まあ、『森の王』や『森の子』なら言うに及ばず、だろう」

煙に巻く言い方だけれどわたしは、気にしない。さらに疑問をぶつける。

「だったら、どうしてソト様を呼び捨てにするんですか？」

一瞬驚いたような表情になったが、すぐにくすくすと笑い出した。
「簡単なことさ」

「どういうことですか？」

すこし腹が立ってきた。明らかにとげのある口調になってしまった。

「それはな、私とソトは、君とネルに近い関係だったからさ。幼なじみでライバル。恋仲にはならずとも、それに近い関係。わかるかね？　そういう間柄だった私たちが、今更敬語や敬称を使うはずもないだろう。こう見えて、私は自己中心的なのだよ。それはソトも同じだがね」

他にも言いたいことはあったけれど、言うのはやめた。言葉でソトさんには勝てない。たとえどんなに非常識なことでも、この人が言ったら真実味を帯びてしまう。そういう雰囲気を持った人だ。

ソト様とテトさんが幼なじみでライバル、というのは信じてもいいと思う。テトさんの言ってしまえば不しつけな話し方にも普通に対応していたし、テトさんに仕事を依頼していたようだし。

仕事？

『森の人』の仕事って、集会で言っていた三つのはずじゃ……。

いや、テトさんにくらいになると、いろいろと依頼されるのかもしれない。全く。凄い人と同居することになったものだ。

「納得してもらえたかね？」

ちよつと困ったような顔で、テトさんは顔を少し傾けた。なんかかわいいな、なんて思いながらも、「はい」と答えた。

「そうかそうか。それはよかった。……おや？」

「どうかしました？」

「いや、な。昨日よりも魔力量が増えているなと思ったのだよ。普通はこんなに急激には上がらないのだが……。昨日、何の魔法を使ったのかね？」

「えっと……『断罪』の魔法の、『光子の剣』をイメージからの方
法で練習目的で発動しましたけど」

テトさんは得心したようにうなずいた。

「つまりあの猛烈な眠りは、その魔法が原因かね？」

「たぶん、そうだと思います。……それより、テトさんって人の魔力がわかるんですね？」

明らかに失態だ、といった風に顔をしかめた。しかし、すぐに表情をもどしてうなずく。

「ミナもそのうちできるようになると思うよ」

「そうですか」

何かを誤魔化したような物言いだっただけけど、何を誤魔化しているのかはわからなかった。

「『光子の剣』は」

「はい？」

「発動の方法さ」

「は、はい」

「『光子の剣』は、手のひらと指から魔力を放出するといい。指と剣が繋がっているイメージができれば、さらにいい。魔力の練り方は、できるだけすばやく、細く練るといい。すばやく、細いほど、質の高い魔法になる」

えっと……それだけ？ もっと簡単な魔法でも色々面倒な手順があったりするのに。

「それだけ、ですか？」

素直に聞いてみた。テトさんは首肯で答え、続けた。

「魔法など、いくつかのポイントさえうまくやればいいのだよ。特に、『断罪』の魔法などの、戦闘用の魔法は。長々と詠唱も、準備動作もする時間など無いのだよ。ネルもそうだっただろう？」

どうだっただろう。両手を合わせて、少し間を空けて、それから右の手のひらをゴアビーストに向けて、左手で右手を押さえた。それだけだったはず。

「私に言わせてもらえば、両手を合わせるのは不要だな。それは初心者向けで、安定する代わりに時間がかかる。それ以外は大丈夫だ

な。ミナ、適当な木の枝を持ってきてくれたまえ」

「……はい」

立ち上がって、外に出た。地面に下りて、手ごろな太さと長さの木の枝を探す。テトさんがやりたいことが、何となくわかった。たぶん、わたしに『光子の剣』を見せてくれるのだろう。サイズは小さめで。

「これでいいかな」

わたしの腕ほどの太さと、長さの枝。それを何本か集め、『小さな友達』で呼び出した植物のツタで束ねる。その束を持ち帰り、テーブルの上に立てた。

「ふむ。このツタは、ミナの魔法かね？」

「はい。『小さな友達』で出しました。しばらくは消えないと思います」

「そうかそうか」

テトさんは立ち上がり、数歩下がった。わたしもテーブルから離れる。

「よく見ていたまえ」

テトさんは、練ると同様左手で右手を押さえた。手のひらを枝の束に向けた。

瞬間、枝をドーム上に囲む光の剣が現れた。小さく細かい、数えることもできないほどの、針のように小さな剣だ。さらに、テトさんが開いた手を握る。それと呼応するように、一気に剣が枝に襲いかかる。

シャツ。

硬い枝が原型を全く想像できないほどに、小さな木片と化していた。粉ほど細かくはないが、それでも、これが木の枝の集まりだったとは到底思えない。さらに、わたしの創ったツタに至っては、跡形もない。まだ消えるには早い時間なのに、だ。

それに、枝を切った音が、あまりに軽い音だった。

「すごい……」

「剣の大きさは、対象の大きさに決める。今回は、木の枝であった上に、室内であるからごくごく小さいものにしたがね。実際はもう少し大きいほうがいい。特に、ゴアビーストなら、一撃でしとめられない場合がある。そのとき、長い剣だと足止めになるのだよ」

淡々と、『光子の剣』の使用方法和、適した状況、発動のタイミングを語る。本当に、この人は凄い。

「テトさん」

話し終えたのを確認して、テトさんに呼びかける。

「何かね？」

「あなた、何者ですか？」

「ただの君の同居人さ」

わたしの完敗だった。

第三章 星降りの夜―3（前書き）

三部です。

さっそく星降りの夜です。儀式の夜です。

今回は物語が大きく動く話になっていると思います。

第三章 星降りの夜―3

とうとう、やってきた。『星降りの夜』だ。とはいえ、夜までは時間がある。星が降る時間となると、もつと長い時間がある。わたしには、出来ることはない。ただ、祈るだけだ。

成功を。

ネルとの再会を。

そして、わたしの世界の始まりを。

『色彩』の魔法。

この儀式が終わった後、やってみようと思う。決意するのに時間がかかったけれど、もう、わたしは迷わない。できようができませんが、ネルに見せるんだ。そして、謝ろう。

天花を供え終えたその足で、わたしはあの場所に向かっていった。

やるべきことはわかっていているけれど、今は待つことしかできず。

やりたいことはわかっていているけれど、今は我慢するしかできず。

あの時見つけた目標は、歩むことすらままならず。

今のわたしはあのころのわたしよりも、劣って見える。

悩みと迷いと、一抹の希望。

無意識のうちに、森の広場に向かって歩いていった。ここに生えるのを拒むかのように、円形に広がる木々。そうすることでできた、円形の空間。枯葉と雑草の絨毯に横たわる。

懐かしい匂いがする。

全く、なんて甘ったるい。ネルに頼れなくなればテトさんに頼り、テトさんに頼ったあとは、思い出に甘える。

「変わりたい」

呟きはすぐに森に溶け込んだ。聞く人など、いるはずもない。ここは、わたしとネルしか近づかない。

右手を両手に魔力を込め、少しはなれたところに放出した。何も考えず、魔力を垂れ流す。無意味な行動だ。しかし、放出した魔力

は小鹿の形になっていく。

「あれ？」

『小さな友達』は発動していない。それに、『小さな友達』ではこんなに大きいのは創れない。体長はわたしよりも小さい。角は未発達だ。

「もしかして、中級魔法？」

無意識に使っていたのかもしれない。もともと『小さな友達』の完成度は高かった。だから、無意識で使えるようになって、まあ不思議ではない。

中級魔法の名前は確か、『結ばれた絆』。

小鹿はわたしの元に歩いてきて、隣に座った。

体を起こし、小鹿の背中を撫でる。頭を少し撫でてやると、気持ちよさそうに目を細めた。

しかし、元々無意識に発動した魔法。小鹿はすぐに姿を消した。

「……………」

わたしは、もう一度横たわり、突然やってきた眠気に身をゆだねた。

冷たい風に吹かれ、目が覚めた。

辺りは暗くなり、夜であることがわかる。空を見上げると星が輝いていて、寝過ごししていないことに安心した。

「服装つて、これでよかったっけ？」

記憶を手繰り寄せ、回答を探す。

「ちやあ、帰らないと」

わたしは全力で走り、家の木を見つけると、一気に飛び上がった。跳躍したまま家の中に転がり込み、テトさんに確認する。

「テトさん、服装つて『星昇る夜』と同じ格好ですよね？」

テトさんは突然飛び込んできたわたしを冷静な目で見つめ、首肯した。

「その通りだよ。さ、はやく着替えるがいい。わたしは星降りを観

賞でもしようか」

そう言って立ち上がり、テトさんは家から出て行った。

テトさんを見送ったわたしは急いで荷物を漁り、ローブとアंकレット、チョーカー、ブレスレットを探した。見つけたそれらを、少々乱暴に取り出して大急ぎで着替える。ローブは、何の模様もない味気ないものだ。正装したわたしは、エステア湖に向かって走り出した。

今回は走ってはいけない、という規則はなかった。

「間に合つてよ」

着慣れない服装で、走りにくかった。けれども、儀式には間に合つたようだ。

エステア湖の周囲に、ローブを着た人が立っている。けれど、人数はそれほど多くはない。全員が揃っているかは知らないけれど、ざつと数えたところ、二十人はいない。十、五、六人といったところ。みんな、一様にひれ伏して両手を胸の前で硬く握っている。

そう、儀式は今も始まっているのだ。

わたしも湖のふちに駆け寄り、みんなと同じ姿勢をとる。すると、不思議と、わたしの願いや悩み、迷いが頭の中を駆け巡った。

ネル。

『色彩』の魔法。

森。

未来。

想い。

普段意識しないことも、何故か表面に溢れてくる。

心細い。

不安。

恐怖。

寂しい。

どうしてどうしてどうしてどうしてどうして。

わたしの心が覗かれているように感じるが、しかし、不快にはな

らない。逆に心強いというか、頼もしいというか、うれしいという気持ちになった。心地よい気持ちだ。

心地よいと感ずることが、わたしは不快だった。しかし、これが儀式の過程である以上、わたしは何もできない。こういう風に感じているのはわたしだけかもしれない。他の人は無心で祈っているのかもしれない。

時折空を見上げてみても、星が降ってくる気配はまだない。来るのが早すぎたのだろうか。

目を閉じて、自分の心を見る。色々な思いが、どろどろと渦巻いている。

「――」
声が聞えた。

「――」
歌声のようだ。歌詞はよくわからない。ただ、静かで神秘的な旋律だ。楽器は一切使用していない。声による声だけの声の歌。

そつと目を開けて、目だけを動かして周りを見る。

儀式の参加者ではない、テトさんのように観賞に来た人たちが歌っていた。

「――」
もう一度目を閉じ、声に耳を傾ける。相変わらず歌詞はわからない。響く声と、澄んだ声。突き抜けるような声と、包み込むような声。わたしが今まで聴いてきた歌の中で、最も、壮大できれいな歌だ。

声が、少しずつ減っていく。徐々に声の種類が減り、音量が減る。歌が、終わった。

急に魔力が増大した。それは、エステア湖からの魔力と、空からの押し付けるような魔力だ。

星が降る。

そう確信した。わたしは目を開いて空を仰ぐ。他の参加者も、観賞に来た人も、みんな空を見ている。

星の光が強くなった。星が空でどんどん砕けて小さなものになっていく。けれど、輝きは失わない。

湖に『星の破片』が落ちた。水面に無数の水柱が出現し、湖の水が辺りに飛び散る。観賞に来た人たちから、歓声が上がった。魔力の濃度が高い湖の水を、わたしたち参加者と観賞者は全身に浴びた。しかし、特に体に変化はない。

「おおおおおおおおおおおおおつ！」

雄たけびが湖に響いた。声の主は一人。

今回の儀式で選ばれたのは一人だった。

湖と星の魔力がその選ばれた人に注がれる。わたしたちが被った

湖の水は、魔力など溶けてはいなかった。

全ての魔力は、選ばれた一人に注がれる。

参加者たちは祈るのをやめて、その一人を見守る。観賞者も、だ。

「おおおおおつ！」

聞き覚えのある声だ。

ハギとコズを助けたときに聞いた、ネルの雄たけびに似ている。

まさかとは思うが、しかし有り得ないことはない。けれど、『森の人』になって、一年もたつてないのに……。

魔力の波動だろうか。猛烈な風が、その一人を中心に吹いた。ロブが飛ばされないように掴み、その人物を凝視する。その人物はうずくまっただまま、顔を上げない。雄たけびだけが、彼の意識があることを証明していた。

その人が顔を上げた。フードは先ほどの風で外れている。

やはり、その人物はネルだった。

暗いはずなのに、ネルの周りは明るかった。大きすぎる魔力の所為、だろうか。とにかく、ネルの周りは明るく、はっきりとその姿が見える。

誰も言葉を発さない。ただただ彼を見守る。

やがて、ネルすらも何も言わなくなった。徐々にネルの周りも暗くなる。

「おい……」「あれって……」「——終わった？」

周りの人たちがぼそぼそと話し出した。当事者のネルは何も言わず、魔力がネルから放出されたようにも見えない。

「おおっ！」

歓声が上がる。わたしはネルのほうを見た。

ネルが立っていた。

「ネル……」

突然、ネルの周囲が小さく揺れた。ネルの足元の地面が、少しえぐれた。

「あれ、『破壊』の魔法じゃないか？」

誰かの呟きが聞えた。

ネルは森の奥に歩いていく。フラフラした足取りだ。両手をダラリと下げている。

「ネル！」

叫んでも、聞いていないのか、ネルは歩く。

森の中に消えた。

「待って！」

わたしはネルを追って走り出した。「待て！」と、他の人から止められたが、わたしは無視して走った。

ネルの通った道は、考えるまでもなくわかった。通った場所は、木が倒れている。わたしは機の倒れている場所を選んで進んだ。

進んでいるうちに気付いた。この方向は、明らかにあそこに向かっている。

わたしとネルの思い出の場所。

森の広場。

わたしは速度を上げて走った。

わたしの予測は、正しかった。

森の広場、その中心にネルは立っていた。

——と、ネルの足元の地面が隆起した。唸り声のような地響きと

共に地面が盛り上がり、森がゆがむ。木々が倒れていく。

わたしの足元も、例外ではなかった。

「きゃあっ！」

「ミナ？」

わたしに気付いたネルが駆け寄ってきてくれた。

「ごめん。魔力に負けちゃったよ」

悲しげな呟きだ。

「負けたってどうということよ。ちゃんと押さえ込んで、成功してるじゃない！」

「そういうことじゃないんだ。魔力は押さえ込んだけど、其処からが悪かった。意識を吞まれたんだよ。いや、魔力に乗っ取られたと言った方が正確かもしれない。結果、ボクは禁術を発動した。今は、自分の魔力が制御できない。今こっやってミナと話しているけど、ボクが少しでも気を抜いたら禁術が発動される」

「嘘よ！　だって、ネルは『森の守護者』になって『森の王』になつて、この森を守るんでしょ？」

「……そうだよ。少なくともボクはそのつもりだった。ああ、そのつもりだったさ。『森の守護者』になつて、『森の王』になつてこの森を守るつもりだったよ。……この森の生活が退屈だって、前に言っただけ？　それは本音だったんだけど、そこを魔力に衝かれるとはね。まったく。親友との約束一つ守れないなんて。ごめん」

ネルは頭を下げて、わたしに謝罪した。けれど、ネルの言っていることはわたしにはわからない。まるで、魔力に意思があるかのようない方だ。魔力は言っただけならただのエネルギー体じゃないか。

「魔力に意思はあるよ。魔力は命あるものさ。森そのものと言ってもいい。けれど、今は星の魔力も加わっている。森そのものとは言えない。言っただけじゃ不純物がまじっている状態なんだよ。完全に森の、ボクの魔力だとは言えない。……あ、来たみたいだ」

ネルは空を見上げた。

わたしも空を見上げる。『森の守護者』だろう。何人かの人が、空からやってきた。

「禁術を使ったボクを、いや、魔力に飲まれたボクを倒しに来たんだ」

当然のことさ。と、ネルは呟いてわたしから離れた。

「さ、ミナ。遠くへ行ってくれないか。ボクはキミを殺したくはないし、キミだって——死にたくなんて、ないだろ？」

「嫌よ！ 新手の冗談なんでしょ？ ドッキリでした！ って言うてよ。あれは禁術じゃなくて、風を起こしただけだって、力加減間違えただけだって！」

自分で言って、有り得ないことだと思った。

「有り得ないよ。ほら、はやく」

わたしに微笑むネルの後ろに、『森の守護者』たちが降り立った。

「『星降りの夜』の成功者、ネルだな？」

感情のまったくもっていない、冷たい声だ。

ネルは振り返り、同じく冷たい声で返す。

「そうだよ」

「禁術使用の罪で、拘束する」

「ボクはいいけど、やるなら——魔力をどうにかしてよ」

薄い笑みをたたえて、ネルはそう『森の守護者』に言った。

「その言葉、我々に対する宣戦布告とみなす」

『森の守護者』は全身に魔力を込め、ネルとの距離をとった。後ろに立つ、四人の『森の守護者』も臨戦態勢になる。

「はあ」

ネルは大仰に溜息をつき、

「どうぞ」

柔和な笑顔を見せた。

第三章 星降りの夜―4（前書き）

第三章四部です。

今回は短めです。

次回はもっと短いです。というか、かなり短いです。

次回で第三章が終了します。

早いですね。

第三章 星降りの夜―4

わたしの隣で、ネルが眠っている。今日でもう何日になだろうか。早く起きてくれないだろうか。ネルとはもっともっと、話したいことがある。

魔力が完全に無くなったネルの手を握り、わたしは眠りについた。そういえば、わたしはもう三日は寝ていないのだった。

わたしが目覚めたとき、ネルも目覚めていたらいいのに……。

「どうぞ」

柔和な笑みを浮かべるネルに、『森の守護者』は少し驚いたようだが、すぐにネルを囲むように移動した。ただならぬ雰囲気、わたしは慌てて逃げ出した。

ネルをその場に残して。悪あがきすらもせず。

ただただ――逃げた。

「『破壊』の魔法つてさ、最大の特徴はその範囲なんだよね」

ネルは呟くが、両手はダラリと下がったままだ。

『森の守護者』たちはネルの呟きを完全に無視し、それぞれが戦闘用の魔法を放つ。

『光子の剣』『光子の匣』『光子の環』『光子の鎖』。戦闘用の魔法は全て『光子の――』になるようだ。今気付いた。なぜなら、『森の守護者』が丁寧な術名を言うからだ。

しかし、そこはプロ。術名を言うのは発動後。つまり、名前を知るのは、目視した後ということだ。

「投降しろ」

術を発動していない『森の守護者』の一人が、ネルに告げる。それは、最終勧告のようだ。わたしは飛び出したい衝動を必死で抑え（飛び出したところで、何の意味もない。むしろ、どちらにとっても邪魔でしかない）、木の陰から状況を見守る。もしかしたら、こ

こで飛び出したら何かが変わるのかもしれない。変わらないかもしれない。飛び出したい。けれど、飛び出せない。

ネルは答えない。ただ、笑っている。

「何がおかしい」

『森の守護者』の腹立たしげな声が聞える。状況的に、ネルは圧倒的に不利だ。『光子の匣』により、三步以上（目測）の移動ができなくなり、『光子の環』で腕と足を拘束され『光子の鎖』で『光子の環』が地面、そして『光子の匣』と完全に連結している。そして、『光子の匣』の外からは、無数の輝く剣が、ネルを取り囲んでいる。今のネルができることなど、顔を動かすことか、言葉を発することくらいだ。

「本当にそう思うのかい？」

ネルはわたしの心、いや、『森の守護者』たちの心を読んだのか、さらに笑う。

じりじりと、『光子の剣』がネルとの間合いを詰める。

「こんなの、拘束したうちにならないと思うよ」

「なに？」

『森の守護者』が問い返した瞬間、ネルを取り囲んでいた、全ての魔法が、砕けた。

ネルの周囲が揺れ、取り囲んでいた『森の守護者』も突然のことで吹き飛ばされる。わたしは木の幹を掴んで、なんとか耐えた。

「どういうことだ」

『森の守護者』が納得いかないといった面持ちで、憎々しげに叫ぶ。

「『破壊』の魔法、『広がる波紋』だよ。とはいえ、発動したのはボクじゃないよ。ボクの魔力さ」

「何わけの分らないことを！」

『森の守護者』たちは立ち上がり、今度は全員が、『光子の剣』を発動した。しかし、今度は剣が出現したと同時に、ネルの周囲が揺れた。何の動作もなく、ネルは術を発動する。「魔法など、いく

つかのポイントさえうまくやればいいのだよ。特に、戦闘用の魔法は」

つまりはこういうことだった。あのときのテトさんの言葉も、今のネルを見ればよくわかる。『光子の剣』が出現して、自分に突き刺さる、ほんの刹那。開いた手を閉じるだけの時間で、魔法を発動する。それは、動作などしていたら無理だろう。ポイントを抑えているからか。

「そうでもないんだけどね。実際、発動しているのはボクじゃなくて、魔力そのものなんだから。動作も何もないんだよ。ボクはただ、ここに立っているだけ。一応、どの魔法が出るかはわかるんだ。あくまでボクの魔力だからね」

ネルは地面に横たわる『森の守護者』全員を一瞥し、両手を広げた。

「『破壊』の魔法、『突き立つ礎』」

ネルは発動の直前に魔法名を口にした。

たぶん、防いで欲しいのだろうと思う。森を守りたいと思うネルが、『森の住人』を傷つけることを望むはずがないのだから。

そして、『森の守護者』たちはその魔法を防いだ。

「『防壁』の魔法。『光子の盾』」

「『防壁』の魔法。『光子の盾』」

「『防壁』の魔法。『光子の盾』」

「『防壁』の魔法。『光子の盾』」

「『防壁』の魔法。『光子の盾』」

全員が同じ魔法で、同じタイミングに魔法を発動した。岩は盾の上に落ち、はじき返された。

しかし、それでは終わらない。ネルの魔力はすでに手の施しようがないほどの暴走を始めていた。

「『破壊』の魔法、『軋む大地』」

宣言の一瞬あと、地面が隆起を始めた。しかも、さっきまでとは比較にならないほどの大きな隆起だ。

「『飛翔』の魔法があるのを忘れたか」

してやつたり、と『森の守護者』が笑う。

「ボクが発動しているんじゃない。ボクの魔力だ。……『広がる波紋』」

また、ネルの周囲が揺れる。ただ立っているだけで、まったく動作がないのが不気味だ。

『森の守護者』たちが、ネルの魔法で吹き飛ぶ。空中にいて、まったく踏ん張りが利かないのだ。ただ一人、何らかの魔法によつてその場に留まった『森の守護者』は辺りの状況を確認している。

「残ったのはあなただけですか」

「ぐっ」

吹き飛ばずにこの場に留まったのは、リーダー格の人物だけだった。

「ああ、まずい」

ネルが呟く。ネルの表情が苦しそうに歪められる。

『森の守護者』は怪訝そうな目でネルを睨んだ。

「止めてください。……『訪れた災厄』」

その名を聞いた瞬間、『森の守護者』表情が変わった。明らかにおびえている。

「止める！それは——」

制止の声など意味があるはずもなく、呆気なく術は発動された。

ネルの周囲が燃え上がる。草が、木が、ありとあらゆるものが燃える。

「おのれええええ！『断罪』の魔法、『天の雷』！」

『森の守護者』が憤怒の雄たけびを上げ、ネルをにらみつけた。お互いの顔を見ればわかる。どちらの魔法も、最上級の魔法だ。戦闘用魔法は全て『光子の——』になるというのは、勘違いだったらしい。というか、そんなはずがないじゃないか。

炎の勢いがさらに増し、無差別に森を燃やす。

『天の雷』が発動した。空から一筋の光が差し込む。それはネルに注がれていた。

「落ちろ！」

「『広がる波紋』」

同時だった。

ネルの魔法が、周囲の空気をゆがめる。雷が落ちた。

一瞬の閃光の後、舞い上がる土煙も晴れ、視界が開けた。

ネルが先ほどと同じ場所に立っていた。

『森の守護者』は木の下に倒れていた。

ネルから少し離れた場所に、大きな穴が開いている。これができた理由など考える必要もない。さらに追い討ちをかけるように、空から火の雨が降り注いだ。どちらの魔法かなど、考えるだけ時間の無駄でしかない。

火の雨が強さを増し、森の広範囲が燃えだした。

「『突き立つ礎』」

『森の守護者』の頭上に、巨大な岩石が出現した。『森の守護者』は諦めたのか、身じろぎ一つしない。

「ごめんなさい」

ポツリと眩き、その手を、勢いよく下ろした。

「意思的に人を殺せる人と、無意識で人を殺せる人。どっちが怖いと思う？」

以前、ネルが唐突にわたしに聞いた。その質問が、一体何を意味する質問かは分からなかったけれど、とりあえずわたしは文字通りの意味で答えた。

「無意識で人を殺せる人、かな」

「どうして？」

「だって無意識で、ってことは殺した人は、殺したことを自覚していないってことでしょ？それか、殺す動機、つまり憎しみや悲しみ、まあ稀にある愛情とか、そういうものがまったく必要ないはずだわ。

それって言うてしまえば、世界中の人を殺せるってことだよ」

ネルは考えるようにうつむき、しばらくして顔を上げた。

「意識的にそれができる人もいるかもしれないよ」

「そういう人は、狂人か人外だね。まあ、無意識で人を殺す人にも
言えるかもしれないけどね」

「そうだね」

特に質問に意味はなかったのか、ネルは空を見上げた。

「じゃあさ、ネル」

「うん？」

「そういう人がいたとして、その人にとって一番不幸なことって何
だと思う？」

わたしのこの質問には、本当の意味で意味はない。ただ聞いてみ
ただけだ。

「そういう人って？」

「世界中の人を意識的にでも、無意識的にでも、殺すことができる
人」

「そうだね……」

ネルは空を見上げたまま目を閉じた。わたしはネルの回答を待つ。
「……人を殺すことを——止めてくれる人がいないこと、かな」

第三章 星降りの夜―5（前書き）

第三章五部です。三章はこれで終わりです。そして、超絶短いです。

次回、第四章「過去と現在の裏側」
お楽しみに。

第三章 星降りの夜―5

「ネ……—ッ！」

わたしは叫びを飲み込んだ。

『森の守護者』の頭上に浮く巨石が、シュツという軽い音の後に、正しく粉になって『森の守護者』の上に落ちたからだ。

「誰？」

ネルが誰ともなく、静かに問いかけた。わたしは、その人物の姿が、どうしようもないほどにはつきりと見え、そしてその人物が誰かわかったとき——言葉を失った。

「ネルとかいったかな、少年。危ないじゃないかね。私がいなければ、あそこで倒れている五人が死んでしまっていたところだ」

「テト様」

「黙っているがいい。いや、撤退してくれないかね」

テトさんは『森の守護者』に命令をした。彼らは一切逆らわずに、その場を後にした。

一体どういうことだろう。

「あなた、確かミナと一緒に住んでる……」

「テト、という」

テトさんはどうでもよさそうに答えた。

「あなたがどうしてここに？」

「自分の娘のような子の親友が大変なことになったら、助けてやるのが人情ってものだろう。自分で言うのもアレだが、私は家族思いの優しい女なのだよ」

茶化すようなテトさんの対応に、ネルはいらだったようだ。けれど、ネルはあくまで冷静に切り返す。

「そういうことではないんですよ。『森の人』のあなたが、今のボクを止められると？ そりゃ、止めてくれるのはうれしいですが、無謀ですよ」

「くつくつく」

突然、テトさんが笑い出した。ネルも動揺を隠せず、目を見開いてテトさんを見つめる。

「私が『森の人』？ 誰が、いつ、そんなことを言ったのかね？」
わたしに言った気が……。

いや、わたしが質問したときは、そうだ、とも違うとも言っていない。

……ずるい人だ。

「じゃあ、何者ですか？」

「この際、はっきり言っておこう。出来ればミナには内緒にしてい
てくれたまえ。いいかね？」

「約束しましょう」

「そうかそうか。素直なのだな。……私は『森の守護者』だ。いや、
違うな。『森の守護者』の中から一人だけ選ばれる、ある存在だ」

『森の守護者』から一人だけ？ そんな存在、一つしかないじゃない
い！

「まさか……」

「そうさ。私は『森の王』だ」

荒れ果てた森の中に、その声は凜と響いた。

第四章 過去と現在の裏側―1（前書き）

なんだか久しぶりのような気がします。

前回は29日でしたから、5日ぶりですか。

作者的にも終わりが見えてきたような気がします。
もうしばらくお付き合いくださいませ。

第四章 過去と現在の裏側――1

「事実、なんですか？」

信じられない、と呟く。

「事実だよ。くれぐれもミナには内密にしていってくれたまえ」

わたしの中で、何かが弾けた。

もうこの際、邪魔だとかそんなことはどうでもいい。

今すぐに確認しておきたいことがある。

「どうしてわたしには秘密なんですか！」

突然現れたわたしを、二人が愕然とした目で見た。けれど、わたしは構わずに叫ぶ。

「どうして、テトさんはわたしに秘密ばかりなんですか！」

「そんなことはないよ。ミナ。今は魔力を抑えてるけど、いつまた魔力が暴走するかわからないんだ。頼むから離れてくれよ」

懇願するようなネルの声。いつもの優しく静かな声は、どこにもなかった。

わかってる。わたしを心配しているんだ。

けれど今に限っていえば、わずらわしい。

「大丈夫さ。今は私がキミの魔力を全て頂戴しているから」

ネルがテトさんに向き直り、

「嘘でしょ？」

と肩をすくめた。

わたしも、信じられない気持ちでテトさんを見つめる。

「事実さ。適当な術を使ってみるがいいよ」

うなずいて、人差し指を立てた。しかし、何の変化も起きない。

ネルは不思議そうに自分の手を見つめている。

「わかったかね。キミは私がここに登場した時点で負けているのさ」
今更気付いた。さつきまで森を焼いていた炎が、完全に消えている。火の雨もやんでいる。黒い炭に変わった木々が、ここで『破壊』

の魔法が発動されたことを語っていた。

「平気なんですか？」

「何がかね？」

「魔力ですよ！　ボクの元々の魔力に、その上、儀式で得た魔力全部だなんて！」

考えてみれば、それは、かなりの負担ではないのだろうか。

「平気さ。少なくとも今は。ほとぼりが冷めれば、少しずつ君に返していくつもりだよ。『森の守護者』の称号はそうだな、次の『星降りの夜』まで停止。魔力の完全返却は、八年後でどうだい？　実際、人手が足りないのが実情でね。少々軽に対応だが、不服かね？」

ネルの表情が緩んだ。

「寛大な処置、ありがとうございます」

こんな丁寧なネル、初めて見た。

「そうかそうか。それはよかった。では、今はゆつくりと休むがいい」

テトさんがそう言った瞬間、ネルはその場で倒れた。

「どうしたのっ！」

わたしがネルの体を抱き上げると、規則正しい呼吸が聞えた。

「眠ってる？」

「突然魔力が無くなったのだから、当然だろう。しばらく眠れば少しずつらい回復するはずだ。ちよつとでも魔力ができれば目が覚めるはずさ。『森の子』以外にとつて、魔力は命以外の何でもないからね。ま、さすがに死にはしないが、意識は落ちる。最悪、目を覚まさない」

さも当然のように解説するテトさんが、無性に腹立たしく思った。「わかつてて全ての魔力を吸い取ったんですか！」

「その通りだよ、ミナ。わたし個人としては、ちよつとくらい魔力を残してもいいと思ったのだが、『森の王』という立場上、それはできない。現状ではあまり重い罰則を与えられないのでね、別のところで償ってもらうのさ。大丈夫。最悪の場合、私がじきじきに魔

力を注ぐことになっている。無論、最悪の場合だがな。それになにより、『破壊』の魔法は術者が発動を止めない限り効果が残り続ける。最後の『訪れた災厄』など、放置していたら火が魔力から独立してしまうのだよ」

「独立？」

「火そのものとして存在するということさ。そうなれば魔法を解除しても火は消えない。森は完全に滅ぶよ」

「……………」

何気なくネルの顔を覗きこんだ。

ネルはすー、すー、と寝息を立て、それ以外の動きはまったくない。試しに顔をつねってみても、顔をしかめることすらなかった。

「ミナ、つのる話もあるだろうが、とりあえず帰ろうではないかね。ネルは一人暮らしだからな。しばらく我が家で預かっておいても構わぬよ。部屋は、ミナの部屋しか空いていないがね」

「……………はい」

「どうして、わたしに秘密だったんですか？」

聞くと、テトさんは言いにくそうに、苦笑した。その苦笑は、はにかんだようにも見える。

「理由は二つある。一つは至極簡単。私の地位を知ると、ミナとの関係がぎこちなくなると思ったのだよ。せつかく得た家族だ。どうせなら、重い空気よりも、軽い空気で生活したいだろう。最悪、私の前から姿を消すことも考えたのだよ。こういう一般的なスタイルの家で過ごすのも、そういう理由だよ。ま、豪邸など私の趣味じゃないがね」

「そんな……………」

「まあ、いざバレたと思えば、君はまったく同じ態度で接してくれた。私の努力は無駄だったようだ」

テトさんは笑う。

「ソト様に敬称も敬語も使わなかったのも——」

「そう、私が上官だからだ。もちろん、幼なじみでライバル。君たちと同じような関係、というあのくだりは事実だがね。そうでなければ、あんな態度のヤツは張り倒しているよ。ミナ以外はね」

開き直ったらしい人なのか……。ますますこの人がわからない。

「二つ目の理由は、こっちはもつとくだらない。私と初めて会った日を覚えているかね？」

それなら今でもはつきりと覚えている。忘れもしない。

「酔ってたんですよね？」

「違うのだよ」

しかし、テトさんは首を横に振った。

「はい？」

「違うのだよ。私と君は、もつともつと前に出会っている」

……………。

わたしにはまるつきり、まったく記憶にない。こんな変わった人に会っていたなら、絶対に覚えていると思う。

「忘れてしまったのかね。まあ、それは仕方がない。君はあの時、ずいぶん小さかったのだから。では、こう言えばわかるかね」

テトさんはそこで言葉を切った。

「『色彩』の魔法」

その単語を口にされて、初めてわたしは気付くことができた。

正直、まったく気付かなかった。よくよく思い出せば、この人以外にありえないのに。この口調。「そうかそうか」という口癖。名前は完全に忘れていたけれど、それでも気付く要素はいっぱいあったのに。

「じゃあ、わたしが名前を教えたときに、一瞬驚いてたのは」

実際、『森の人』なってから二回自己紹介をしたのけれど、両方とも同じ反応だった。一瞬、驚いたような表情をしたのだ。

「ほう、アレに気付いていたのかね。素晴らしい観察眼だよ。そうさ。私は覚えていたのだよ。いつか、『色彩』の魔法を教えなければ」

ばならないと思つてね」

「六年も待つてくれたんですね」

テトさんは小さく笑った。

「六年など、私にとつては一瞬だよ。前にも言つたが、私は五百二十三歳だからね。まったく。職場はみな年上ばかりさ」

あれ、そういえばソト様つて考えてみれば、もうかなりのご老体じゃ……。

「やつと気付いたか。ヤツとは幼なじみだが、そういう気持ちを持つてるのは私だけだ。年をとつても外見が中々変化しない我々に多くあるミスだよ。ソトは私のことをどう思つていいのか、私には皆目想像もできんよ」

笑えない冗談だ。

「あいつは『森の人』の仕事をサボつて遊びに来ていた。それもいけない。誤解が誤解を事実に変えていたのだよ。ああ、脱線したな……あのとき、年は離れていたが新しい友達ができた、とそう思つたのだよ。友達が多いほどいい」

なんだ。怒るほどの理由でもない。むしろ、秘密にされていたことに怒ることが馬鹿馬鹿しく思うほど、どうしようもない理由だった。しょうもない理由というのは簡単だけれど、それは言つてはいけないと思う。どうしようもない理由だというのは認めるけれど、それはわたしとの関係を保ちたかったからだ。これを否定してしまえば、それはテトさんに対する侮辱でしかない。

テトさんは小さく嘆息した。

「結局、私は失うことが怖かったのだよ——君という存在を」

第四章 過去と現在の裏側――2（前書き）

2話同時投稿です。

第四章 過去と現在の裏側―2

『星降りの夜』を終えた森の空は星一つない、真つ黒な空だ。その中に輝く月は寂しげで、まるでわたしの心みたいだ。

テトさんも、ハギもコズもいる。

けれど、君がいない。

今一番話したい人がいない。

月が一つしかない空も、わたしのその気持ちに拍車をかけ、気分は沈む。けれど、テトさんたちの前では落ち込んでいないようにみせた。

サー、と風に吹かれた枝が鳴った。その音も寂しい音に聞える。いたたまれなくなつて、わたしは部屋に戻った。

「ネル、起きた？」

最近部屋に入る前にこう呼びかけるようにしている。返事が聞える気がしたからだ。

当然のように返事は聞えず、代わりに静かな寝息が聞えてきた。わたしのベッドでネルが眠っている。今朝入れ替えた干草は、まったく乱れていなかった。

わたしはネルの隣、ベッドの下にうずくまる。

そろそろ、寒くなってきた。明日は、もつと沢山持つてこよう。

今日も、暖かい部屋の冷たい空気の中で眠りについた。

「えっ？　今までの暮らし、ですか？」

わたしがテトさんと同居して三日目に、テトさんが唐突にそう切り出した。そのころにはだいぶ打ち解けていて、今とほとんど変わらない関係だった。

「そうだよ。すこし興味があるのさ。最近の『森の子』が一体どういった暮らしをしているのかがね。ちなみに私が『森の子』だったころは、友達と遊んでばかりいたよ」

「わたしもそうでしたよ。毎日毎日遊んでました。たまに、エステア湖まで行って『森の人』から話を聞いていましたけど」

「そうかそうか。私のころと特に変化はないのか。なるほど。……
ということは、今の森の変化は私たちの責任か」

後半はぶつぶつと呟いていた。今ならその意味がわかるけれど、
当時はさっぱり意味がわからなかった。とはいえ、どういう変化が
起きているのかまでは今も知らないけれど。

「いやいや、ありがとう」

一体何が知りたかったのだろう。

「どういたしまして」

小さくお辞儀をして、今度はわたしがテトさんに聞いてみた。

「テトさんは、『森の人』になってどういう風に生活が変わったんですか？」

テトさんは昔を懐かしむように目を細め、やがて語りだした。

「仕事仕事でつまらなかったよ。自分で言うのもアレだが、私は優秀だった。魔力量も『耐性』も。だから普通では頼まれない仕事まで頼まれた。今では大分減ったが、当時は思い出すのも嫌なくらい多かった。魔法の練習など、ここ三百年前から始めたくらいだ。二百年を棒に振った。気付けば私は五百二十三歳だ」

目の前に座るテトさんは、若くきれいな人だ。到底五百二十三歳には見えない。まあ、外見にあまり変化がないのがこの種族の特徴なのだけだ。

「魔力を手に入れると、外見の変化が少なくなる。まあ、老いれば早いがね。ソトなど、そろそろ寿命じゃないのかな」

このときにはソト様の存在をわたしは知っていた。『森の守護者』にそういう名前の人がいて、どんな顔かくらいだが。

「ソト様って、今おいくつなんですか？」

何気ない気で聞いて、その答えに絶句したのを覚えている。

「ソトの歳か？ …… 八百九十八歳だったと思うよ。早い者なら死んでいるな。ヤツのあの元気さは見習いたいものだ」

そう言ったテトさんは、少し寂しそうに見えた。
その表情がどういう意味を持つのかわたしにはわからないけれど、
わたしが踏み入ってはいけなような類のものなんだろう。そう思
う。

わたしは曖昧に頷いて、その場をやり過ごした。

なぜか猛烈にハギとコズに会いたくなって、わたしは森を走った。
乱暴に地をけり、穴の前に飛び上がる。コズの落下防止用につ
いた板（『森の子』の家には基本的にある。が、『森の人』の家には
なく、最初は驚いた）の上に着地し、何も言わずに中に入った。

「あれ？ ミナだ。おかえりい」

コズがいて、わたしを迎えてくれた。

「うん。ただいま。ハギはいるの？」

「うーうん。今水を汲みに行ってるよ。すぐに戻ってくるんじゃない
かなあ」

「そっか」

椅子に座って息をつく。

「どうしたの？ 嫌なことでもあった？」

コズがわたしの顔を覗きこんで心配そうに言った。

こんな小さな子にまで心配されるなんて……。

「大丈夫よ。……ねえコズ。最近どんなことしてるの？ わたし、
聞きたいな」

コズは無邪気に笑い、ハギが帰ってくるまでの少し長い時間話し
続けた。わたしは時々相槌を打って、たまにほめたりした。

「おや、ミナ。帰ってたのか」

ハギが帰ってきて、開口一番そう言った。

「うん」

「あつ、ハギお帰り！」

「うん、ただいま」

ハギはバケツを持って、わたしの横を通り過ぎ、部屋の隅に置い

た。とりあえず今は用事を済ませないらしい。

ハギはコズの隣に座った。ハギとコズが並んですわり、わたしは二人と向き合う形に座っている。『森の子』として一緒に暮らしていた時のことを思い出した。懐かしい感覚。

「最近どうだい？」

「どうって？」

「そりゃあ、体調とか仕事とか」

「大丈夫。何にも問題ないよ」

「生活は楽しいかい？」

「うん。とっても」

嘘だ。最近ほとんど笑ってないじゃないか。目をそらすな。ハギに言っても仕方ないし、ここで「楽しくない」って言うのも問題だけれど、少しくらい甘えてもいいじゃないか。

……甘えても？ 何を言ってるんだわたしは。甘える？ こんなときに？ ネルが目を覚まさないですつと眠っているときに？ 強くなりたいてって思ったばかりなのに？ どこまで弱いんだ。わたしは。

「どうかしたの？」

コズの問いかけで正氣に戻った。「ううん。なんでも」と笑って誤魔化して、わたしは二人に別れを告げた。

自宅に帰って早々、わたしはネルが寝ているベッドの隣に座った。

ねえ、聞える？

君の隣にいるんだよ？

聞えてるでしょ？

ねえ、ねえ、目、開けてよ。

「こんなはずじゃなかったのに」

そうだ。わたしたちはこうなるはずじゃなかった。

ネルは『森の守護者』になって、『森の王』になるはずだった。

わたしは、そんなネルを支えるために、やっぱり『森の守護者』に

なるはずだった。

一応、ネルは『森の守護者』になったけど、今はいつ目覚めるかもわからない眠りの中。こんなことなら『星降りの夜』に参加しようなんて、言わなければよかった。そうすれば今頃、ネルは新しい魔法の練習をしていて、わたしはそんなネルを見ていられたはずなのに。わたしの一言が、それをできなくした。

全部わたしのせいだ。

わたしが悪い。

わたしが出ようなんて言ったから。

わたしが弱いから。

わたしが、わたしが、わたしが、わたしが、わたしがわたしがわたしがわたしわたしわたしわたしわたしわたしわたしわたしわたし！
ぼん、と後ろから肩を叩かれた。

振り返ってみると、そこにはテトさんが立っていた。

「勝手に部屋に入らないでください」

「すまないね。ネルの様子を見にきてみたのだよ」

まったく悪びれた態度がない。当然だろう。この人にとって、当たり前な行動でしかないのだから。

「あまり自分を責めるものではないよ。確かに引き金は君だが、原因は私に起因するのだから」

ネルの額に手を当て、テトさんが諭すように言った。

「どういうことですか？」

「君はソトに『星降りの夜』を勧められた。そして、ソトにそれとなく言ってもらうように、私が頼んだのだよ」

「どうしてそんなに回りくどいことを」

「他人の魔力量を測るのが『森の守護者』特有の技だからだよ。『耐性』を測るのは『森の子』でもできるがね。ほら、そのときはまだ、私は君に『森の王』だということを隠していただろう」

そっぴいばそっぴい。

つまり、全てはこの人から始まり、この人で進む。そしてきつと、

この人で終わるのだろう。

わたしとネルを取り巻く、魔法と物語は。

悪い言い方をすれば、きっと、テトさんが死んだとしても何の变化も起きない。

いつまでもいつまでも、わたしたちの物語に干渉し続ける。

「それにしても、思ったよりも遅いな。私の推測ではすでに魔力は回復し、幾分かは魔力を返還している手はずだったのだが」

わたしにもかすかにしか聞えないほどの小声で、ぶつぶつと呟いている。テトさんから視線を外し、ネルを見た。

相変わらず静かな寝息を立てるだけで、まったく他の動作がない。目に動きがないから、夢も見えていないのだろう。

「ふむ。もう少し様子を見て、それでも起きないようならごくごく少量の魔力を注ぐでしょう」

立ち上がり、テトさんが言った。そして、そのまま部屋を出ようとする。

「ネルを起こすってことですか？」

立ち止まり、こちらを振り向くことなく、テトさんは答える。

「その通りだよ。忘れたのかね？ 森は少しでも多くの労働力を必要としている。それに、私もいつまでも寝ていられては気が滅入る」
言い方は素っ気無く、冷たいものだったけれどわたしにはわかった。

まったく。どうしてこういときだけ素直じゃないのだろう。

「テトさん」

「何かね」

「森が労働力を必要としているって、どういうことですか？ 今までも何度か言ってますけど」

お礼の変わりに、気になることを聞いてみた。きっと、テトさんもそのほうが楽だろう。素直じゃないときは、どこまでも素直じゃない人だから。

「……………」

押し黙り、何も言う素振りを見せない。

重すぎる沈黙の中、テトさんは全身をこちらに向けた。そして、とびっきりの笑顔で、

「極秘事項だ」

と、わたしに告げた。

「え？」

「案ずることはない。こういうことの為に、私たちがいるのだ」

テトさんは今度こそ、わたしの部屋から出て行った。

もう少しの我慢だ。そうすればネルとまた話せる。わたしには、いっぱい話したいことがあるんだ。

第四章 過去と現在の裏側―3（前書き）

しばらくネット環境がない状況になるので、次回まで期間が開きます。

詳しいことはHPに書いています。
ブログ

<http://id1153.blogspot0.fc2.com/>

新作の情報とかいろいろ書いていくつもりです。

第四章 過去と現在の裏側―3

今日でもう何日になだろうか。早く起きてくれないだろうか。ネルとはもっともっと、話したいことがある。

魔力が完全に無くなったネルの手を握り、わたしは眠りについた。そういえば、わたしはもう三日は寝ていないのだった。

わたしが目覚めたとき、ネルも目覚めていたらいいのに……。

わたしの視界は睡魔によって、暗く閉ざされた。

こんなご都合主義がまかり通っていいのか。今のわたしの感想はこれに尽きる。

嬉しさとか感動とか、そういったものが今頃遅れてやってきた。

ああ、うれしい！

隣に立つテトさんは、どこか曖昧な表情を浮かべている。

「ネル！」

わたしは思わず飛びついた。

ベッドには、ネルが上半身だけを起こして座っている。目を覚ましている。

テトさんが、今まさに魔力を注ごうとしていた瞬間に、ネルは目を覚ましたのだ。

「ミナ……？」

「なかなか起きなくて心配したんだよ！」

流れた涙を隠すために、わたしは抱きついたまま言った。

「……？　どういうことですか？」

「少年の魔力を私が奪ったのは覚えているかね？」

テトさんが静かな声で尋ねる。

「ええ」

「それが原因。君はあの日から三十三日と半日、ずっと眠っていたんだよ」

「冗談、でしょ？」

信じられない、とネルが首を振ったのがわかる。わたしはまだ抱きついた姿勢のまま。

「冗談ではないよ」

「……」

わたしはやつとの思いで顔を上げ、ネルに事情を説明した。

「なるほど。心配かけたんだね。ごめん」

一回の説明で理解してくれたようだ。素晴らしい理解力。

「いいんだよ」

ちよつといい雰囲気じゃない？　なんて思ってたら、テトさんの声が割り込んだ。

「数日は安静にしているといい。どうせミナの部屋だ。私は迷惑しない。魔力の返還はとりあえず、今日の夜から開始する」

気を利かせてくれたのか、テトさんは部屋を出た。

「話したいこと、一杯あるんだ」

「うん」

ネルが眠っていたときのこと。

ネルと会わないと言った後のこと。

テトさんのこと。

溜め込んだ全てを、吐き出した。

ネルも、そうだったと思う。

わたしと張り合うくらい沢山話してくれた。

「お互い、大変だわ」

「そうだね。大変だ」

それから三日後、テトさんの安静命令が解除された翌日の朝。ネルはわたしたちの前から姿を消した。

わたしがいつもよりも早く目を覚ますと、隣で眠っているはずのネルがいなくなっていた。近くにいたろうと思いい、家中を探し、

外も探した。けれど、どこを探しても、ネルはいなかった。

ねえ、聞える？

わたしはここにいますよ。

ねえ、聞える？

やっと話せるようになったのに、いなくならないでよ。

ねえ。

家に戻ると、テトさんが起きていた。念のためにネルのことを聞いてみても、

「私が起きたのはたった今だ。とりあえず、私も探してみよう。ミナも休んだらまた探してくれたまえ」

と言って家から出て行き、特に収穫はなかった。少し水を飲んでまた外に出る。いつも歩きなれた道が、全然違うもののように感じられた。気持ち一つでこんなにも変化するものなのか……。

「あ、すいません」

誰だかわからないが、『森の人』に会った。わたしは迷わずネルのことをその『森の人』に尋ねた。

「ネルっていう男の子知りませんか？ 『森の人』なんですけど、耳がとても尖がって身長はわたしよりもちよつと大きくて……」

『森の人』はしばらく悩んだあとに首を横に振った。

「すまんが、見てないな。どうかしたのかい？」

「目を放した隙にどこかに行っちゃって」

「はっはっは。見かけたら教えるよ。そういうのに役立つ魔法を持つてるからね。君、名前は？」

「ミナです」

「あい、わかった。見かけたら連絡するよ」

「ありがとうございます。お願いします」

『森の人』何度もお礼を言つて、わたしは走り出した。いい人だ。ホントにいい人だ。見ず知らずのわたしのために。

ちよつとした感動は胸の片隅に追いやり、ネル探しに集中した。
「見つけたかね？」

テトサンの声が聞え、わたしは周囲を見回した。しかし、テトさんの姿はどこにもない。

「テトさん？」

「ああ、すまない。今魔法で話しかけているのだよ。口に出さずとも思えば聞える」

なるほど。さっきの『森の人』の魔法もこの魔法なのだろう。たぶん。

「で、ネルは見つけたかね？」

「いえ、まだです。テトさんは何か収穫ありましたか？」
ダメ元で聞いてみる。

「いや、なにもない。もしかしたらミナが何かを掴んでるかもしれないと思って通信してみたのだよ。いやはや。狭いように思っても広いものだな」

「暢気なこと言っていないで探してくださいよ」

ちよつと強く念じる。

「いやいや、探しているともさ。それでも全速力で走っているのだよ？」

テトさんの全速力ってどれくらいの速さだろう？

それからずっと『会話』をしながらネルをさがしたけれど、何も収穫はなかった。

ネルはいまだに帰ってくることはなく、すでに九日がたっていた。わたしにはすでに心当たりもなくなり、正直なところ、探すことができなくなっていた。わたしもテトさんもハギも、口には出さなくても諦めて待つことしかできないとわかってしまった。十五日を過ぎると、探すことすらなくなった。

代わりに、寝る前に祈ることにした。

「ミナさん」

わたしを呼ぶ声が聞え、声のしたほうに振り返る。

「アキじゃない。どうしたの？」

アキは最近知り合った『森の人』だ。わたしと同期のはずなのにわたしを「さん」づけで呼ぶ。癖であり、たとえ年下でも同じらしい。

嘘でもいいから「ミナさんを尊敬しているんですよ」なんて言うて欲しかった。尊敬できるような部分なんてないと思うけど。

アキは何度か声を発さずに口だけを動かし、やがて声に出して言った。

「あの、『小さな友達』を教えて欲しいんです」

「え？」

「ミナさんは『小さな友達』の技術があるそうじゃないですか」

どこからそんな情報を……。困惑するわたしを置いてきぼりにして、アキは続ける。

「僕としては、『小さな友達』はとても応用の利く魔法だと思うんですよ」

情報元はドズさんあたりだろうか。

「聞いてます？」

わたしの顔を覗きこみ、怪訝な視線を向ける。

「えっ？ ええ。わかった。教えてあげるわ」

ネルに教えてもらったときのように、アキの手を取って簡単に説明する。ただ、あのときの説明はあくまで簡略化した方法だった。

アキには正式な手順を教える。

「……なるほど。……この魔力の練り方を変えれば、もっと大きなものができそうですね」

わたしなんかよりも才能があるのじゃないだろうか。アキはすぐに『小さな友達』をマスターした。

「いえいえ、そんな。ミナさんのものより完成度が落ちますよ。細かい模様とか、仕草とか。あなたのものは、もっと繊細です」

アキは微笑し、わたしに一礼した。

何となく気分がいい。

「ありがとうございます」

「いいのよ。わたしにできることなら手伝っわ」

「ありがたいです。では、また今度お願いできますか？」

「わたしにできることなら、ね」

たぶん、もう何も無いのだろうけど。

「はい」

アキはまた小さくお辞儀をして、『飛翔』の魔法で空へと消えた。どうしてアキがわたしを慕うのかわからない。『小さな友達』は本当にできなかったようだけど、明らかに彼のほうが技術はあるのに。

わたしは疑問に思いながらも、散歩を再開した。もともと、アキに魔法を教えるために外に出たのではない。結果的には気分転換にはなったけれど。あ、今度、彼に『飛翔』の魔法教えてもらおうか。便利そうだ。最近ドズさんにも会ってないし、いい加減新しい魔法も覚えないとダメなヤツになりそうだ。

考え事をしながらであつても、外を歩くというのはいいものだ。見慣れた場所に、思わぬ発見があつたりする。そう思ったのは、まあ、今その発見があつたからだが。

「こんなところにあつたんだ」

わたしが見つけたのは、とても懐かしいものだった

第四章 過去と現在の裏側――4（前書き）

お久しぶりです。

ネット環境が整いましたので、星降る森最新話、お届けします。

第四章 過去と現在の裏側―4

当時、ハギとコズと同居を始めて間もなかったわたしは、一日のほとんどを外で過ごしていた。その日は、何となく外に出て、何となく、夜遅くまで外でいた。

気がつくのと、辺りは真っ暗になっていた。

「あ、ちよつとマズいかも」

気付いたときにはすでに遅く、帰り道がわからなくなっていた。別に帰らなくて問題があるわけではない。コズも歳のわりにしつかりしているし、ハギだって「夜の森を知るのも、勉強だ」なんて言つて、自ら率先して突然朝帰りをしたりする。わたしは今回が始めてだが、問題はないだろう。

「それにしても……」

夜の森は不気味だった。ギーギーと、夜行性の鳥や獣の声が聞え、水の爆ぜる音も、不気味さに拍車をかけていた。

「よくこんなところで一晩過ごせるわ。ハギって変わった人なのね」この手の呟きは誰も聞く人がいなければ寂しいものだ。すぐに口をつぐみ、朝を来ることを待った。けれども、嫌なときほど時間の進行が遅く感じるのが世の常。朝はなかなかやってこない。

寝れば時間の早さも何もない。それに気付いたわたしはその場に寝転び、星空を見上げた。

不思議と周囲に木の生えていない場所で、星空が遮られることなく見えた。こんなに広い空を見上げるのは久しぶり。森の中は木の枝で少ししか見えない。エステア湖ならこれよりもっと見えるけれど、魔力の圧力で苦しくて長居ができない。ぼーっと空を見上げていると、突然わたしの目の前に顔が現れた。

「大丈夫？ どうしたの？」

わたしと同じくらいの男の子がわたしの顔を覗きこみ、珍しいものでも見ているかのようにわたしに話しかける。

「ねえ」

「大丈夫。帰り道がわからなくなったただけだから。夜が明けたら問題ないわ」

答えると、男の子はわたしの隣に座った。

「……………」

「……………、なにかな？」

男の子はわたしの隣に座り、けれども何もしゃべらなかった。変だと思って声をかけた。

男の子は答えず、空を見上げている。

「うん。退屈だろうなって思ったから」

長い沈黙のあと、ぽつりと呟くように言った。静かで優しい声だ。

「ネルっていうんだ」

またしばらくの沈黙のあとに、男の子が言った。

「えっ？」

いきなりしゃべるものだから、何のことだかわからなかった。

「ボクの名前。キミは？」

「ミナよ」

「そう」

「うん」

それきり、わたしたちは話さなかった。

ネルとの出会いは、テトさんとは対極の静か過ぎる出会いだった。思えば、このころからネルと沈黙に陥るのは平気だった気がする。

「これ、あげる」

夜が明け、別れ際にネルがわたしに何かを差し出した。黒い立方体で、特に何の変哲もない。

「なに？これ」

「使い方しだいでも善くも悪くもなるもの。もらい物だからよくわからない」

…………… 不用品処理ですか？ていうか、ほとんどのものが、当てはまるよ。

「……そうだね。まあ、受け取ってよ。役に立つかもしれない」

「あ、ありがとう」

わたしはその何かを受け取った。ネルは微笑み、歩いていった。わたしは一人取り残された。

「帰るか」

太陽が昇り、帰り道もわかるようになった。ここに留まる理由はないし、一応ハギやコズにも顔を見せておかなくてはいけない。黒い立方体の物体をパンツのポケットに押し込み、家路に着いた。

「何て言ったらいいかな」

もしもの時のために言い訳を考えながら歩く。名案は浮かばなかった。

家に帰っても、普通に「おかえり」と迎えられるだけだった。けれど、黒い立方体の物体は消えていた。

長年放置されていたためか少々腐敗しているけれど、あのときの黒い立方体の物体で間違いなさそうだ。それを持ち上げ、よく観察する。

「特に変なトコはないわね。中にも何もないし……」

腐ってもろくなった箇所にも穴を開けて中を覗き込んでも、何もなかった。魔力も感じない。となると魔法によってできた物体でも無さそうだ。

「テトさんに見てもらったらわかるかな？」

ポケットにそれを押し込み、わたしは家路についた。

家に着いてテトさんに見てもらおうとポケットに手をつ突っ込むと、あの物体は消えていた。

正直私は悩んでいる。ミナがネルを心配するのは当たり前だ。しかし、アイツは探しても見つかるはずがないのだ。いや、正確に言えば、すでに見つかっている。私が見つけた。そして『モノ』を預

かったわけだが、しかし、それを渡すタイミングがつかめない。

「まったく。厄介なことを安請け合いしてしまったものだ」

後悔しても仕方がない。後悔するぐらいなら進むほうが断然いい。私はネルから預かった『モノ』を見つめ、机の引き出しにしまった。「ただいまあ」

おっと、噂をすれば何とやら、だ。

「あ、テトさん。いいんですか？仕事」

「問題ないさ。私の仕事の大半はソトに任せている。私はゆつくりとくつろぐことが可能なのだ」

元々望んで得た立場でも権力でも肩書きでもない。その場の流れで『森の守護者』になり、その場の流れで『森の王』になったのだから。

「らしいですね」

「そうほめるな。……ところで」

「ほめてません」

『モノ』のことを言おうとしたらミナに突っ込みを入れられた。またタイミングを失う。

「そうだな。……で」

「仕事といえば……『森の王』ってどんな仕事があるんですか？」
質問されれば答えなければならない。仕事柄、そういう癖がついてしまった。これが制御できないから、ちゃんと『モノ』の話ができないのだ。

「仕事か？面倒極まりないよ。森の魔力量の調整が主な仕事だが、面倒だからこれは全面的にソトに指揮を取ってもらっている。必要なら手を貸すがね」

ミナが呆れたように肩をすくめた。わたしは構わずに続ける。

「他には、ゴアビーストの長との対談や人間の王とも対談をすることもある」

「えっ？人間ですか？」

「そうとも。家具や衣服も元々は人間の技術だ。我々がそれを模倣

したのに過ぎないのだよ。『森の住人』は人間とは無関係ではいられない。勿論ゴアビーストとも。常に関係しあっているのだよ。まあ、ゴアビーストから得られる文化など何も無いがね」

ミナは信じられないと、頭を振る。

「人間を見たことなんてありませんよ」

「それは当たり前のことだよ。人間との会談は人間の国で行われるのだからな。それに、稀に人間が進入してくる場所には君たちは近づかないだろう」

「それはそうですけど……。でも、人間の国に行って危なくないんですか？」

「そうかそうか。まだ人間に対しての誤解は残っているのか。当たり前か。我々が公開していないのだから。」

「心配は無用だよ。彼らは友好的だ。無論、一部我々に対して排斥的な意見もあるがね。もつとも、仮に……万が一、争いが起きたとしても、科学と魔法では魔法が優位だ。我々には魔法というカードがあるのだよ。ま、今の王は穏健派だから争いは起きないだろうがね」

「カガク？」

「そうだ。人間は魔法が使えない。だから世界を、自然を研究し、開発し、世界には無いものを作り出す。機械と呼ばれるものが例だな。素晴らしい技術だが……元は自然にはないものだ。自然と世界に対する負担がある」

「なんでそんなものを作るんですか？」

「自分たちの『世界』を広げるためさ。そうだな。またいつか人間の国に連れて行ってあげようではないかね。別に行ってはいけないうという掟など存在しないのだから」

ミナは目を見開き、しばらく呆然と立っていたが、やがてうつむいた。しばらく待っていると、満面の笑顔で顔を上げ、

「はい！」

と何度もうなずいた。

「おっと、私の仕事の話だったな。他には雑務しかないよ。基本的には対談以外にやる気はないね」

「本気でやる気ないんですか？」

笑みが薄くなり、呆れたような細い目で私を見る。無論、やる気などないのだが。

「やる気など問題ではないのだよ。問題なのは、やるかやらないかだ。私は私がやるべきことをし、私である必要がないことをソトに任せているのだ」

「……」

細い目に、温かさが消えた。冷たい冷たい目だ。

「いずれわかるさ。焦る必要などない。そうやって大人へと成長していくのだよ」

私は逃げるようにして家から出た。

第四章 過去と現在の裏側―5（前書き）

本章もこれで最後です。

前回に引き続きテトさん視点です。

ごめんなさい わかりにくいですが、途中でミナ視点に戻ります。
そこで切ればよかったのですが、話数とか文字数の都合で切りませ
んでした。

次回、最終章「色彩の魔法」お楽しみに。
いやいや、早いものですね。

第四章 過去と現在の裏側―5

幼いころはよく外で遊んでいた。が、ここ五百年はろくに散歩もしていない。『森の王』だから、というのもあるのだがどうも職場と家の往復ばかりになっている。

まるで人間の男みたいだな。公共機関や王城に勤めている人間はそうらしい。まったく、無駄な一日だよ。生きるために働くのではなく、働くために生きているみたいではないか。

目的と手段が逆転していると、私はここで忠告しておこう。聞えてはいないだろうがね。

「『森の人』なら仕事など楽なものにな」

天花など供えるのに半刻（人間から得た時間の概念。『森の住人』は使用しない）とかからないだろう。こんなことなら『星降りの夜』の儀式など参加しなければよかった。ま、人間との対談は面白いから、それは得した気分だが。私たちにはない考え方を得られるわけなのだから、話すだけでも価値がある。さらに酒（森の酒のほうが私の行く人間の国の酒よりもアルコールは強い）を交えば、その人間の心の内が垣間見れる。それが本物の心、すなわち本性だとは言わないがね。抑圧された感情が、大きく膨らんで現れると言えば角が立たなくていいかもしれない。余計に問題かもしれないが。

背中から気配を感じて振り向かずには相手を確認する。

「ソトか」

「ふむ。よく気付いたな」

確認して初めてソトに振り返った。

「魔力の流れでわかるよ。どこに誰がいるかなど、一＋一の計算と同じくらい楽にできる」

「では、なぜネルとかいうあの少年の行方をあの少女に教えないのだ」

怪訝そうな目でソトが言うが、そんなのわかりきったことだ。

「簡単なことだよ。頼まれたからさ」

「誰に」

「それこそ簡単なことだよ。聞くにも値しない。愚問と言っても過言ではない」

ソトは少し顔をしかめた。

「あの少年本人か」

「その通りだよ」

そうだ。ネルたつての頼みだ。私はどうにもできない。アイツの決めたことだ。私は何も口出しはしない。けれど……ま、ふふ。アイツに意地悪するのも楽しいかもしれないな。どうせ、大したことじゃない。私がミナに『森の王』という肩書きを隠したのと同じようなレベルのことなのだから。あー、本当に意地悪してやろうか。いやいや、しかし……。

「どうした」

ソトが何もしゃべらなくなった私の顔を怪訝そうな目で見る。

「なんでもないよ」

「少年のこと、あの少女に教えてやる気にならなかったか？」

ぐっ鋭い。

「別にそういうわけではないよ」

素直にうなずくのも何となく嫌だ。

「そうか。さあ、今日は少し働いてもらおうか」

ソトが意地悪く笑う。

「断るよ」

「わかっていても」

私は笑い、ソトは肩をすくめた。

「よろしく頼むよ。ソト殿」

「お任せあれ。『森の王』」

言葉通り全ての仕事をソトに任せ、私は家に帰った。『モノ』を机の引き出しから取り出し、それを机の上に置いた。

「これはもう必要ないな。ネル、私を信用するには人生経験が足らんよ」

指先に火を灯し、その『モノ』に触れた。

『モノ』は炭に変わった。

決心がついた。

「ミナ」

椅子に座り、のんびりとお茶を楽しんでいたミナの前に座る。

「あ、テトさん」

「私の仕事は何だったか覚えているかね」

「え？」

突然の質問に、ミナがキョトンとした表情で私を見返す。

「覚えているかね？」

「えつと……確か森の魔力量の調節とゴアビーストと人間の王との対談。それから、雑務が色々。でしたっけ」

中々よい記憶力だ。私も鼻が高い。いや、私が教育したわけではないのだが。

「その通りだよ。それでは、以前私が約束したことを覚えているかね？」

「人間の国に連れて行ってくれるんですよね」

「その通りだよ。実は明日にでも発とうと思うのだが、どうだね」

「えつ、明日、ですか？」

「うむ。何か用事でもあったりなかったりするのかな」

ミナは思い出しているのか、うつむいて頭を左右に振っている。しばらくして、ミナが顔を上げた。

「はい、大丈夫です」

あれだろう。ミナは大切なことを忘れてしまって、思い出すのに時間がかかる体質なのだろうか。

「そうか、ならば明日だ。……そうだ」

「はい？」

「いや、なんでもない」

「……？」

私は小さく笑い、その場から逃げるために外に出た。

結局、黒い立方体の物体は探しても見つからなかった。でもまあ、今日見つかったのだから、そのうち見つかるだろう。今度は完全に腐敗しているだろうけど。

テトさんは家にはいなかった。

「テトさん見せたいものが！」

「何かね？」

「あれ？　なくしちゃった……」

みたいな展開にならなかったのだから、この場合テトさんが家にいなかったことはよかったことだと思う。きっとそうだ。誰だって失敗というものはしたくないものだし、いくら失敗は成功の元で失敗が人を成長させるとしても、失敗せずに生きていて問題ないというのならば、失敗などしたくない。自分の脳内に恥ずかしい記憶が残ることもなければ、他人の脳内にわたしの恥ずかしい笑い話が記憶されることもないからだ。

しかしまあ、わたしは失敗に失敗を重ねさらに失敗を二乗したくらの失敗をすでに経験済みであるから、多少の失敗など対して気にはならないのだが。

……どんな失敗か？

教えるわけがない。

「今からどうしよう」

今更外に出るのもアレだし、話し相手がいるわけでもない。おなかも空いていない。あ、でも。

「喉、渴いたかも」

川から水を汲んで、テトさん自作のろ過機で川の水をろ過する（今までは加熱消毒と目に見えるゴミを取るだけだった。ろ過機は人間の技術らしい）。ろ過した水を魔法で加熱して保存していた葉を

入れる。

「いいにおい」

ふんわりといい香りがしてきた。透明だったお湯が茶色く変色している。

「できた」

コップを持って椅子に座る。一口飲んで、コップを机の上に置いた。

ゴトツと音がした。

「ミナ」

テトさんが帰ってきたようだ。テトさんはわたしの前に座り、小さく笑った。

「あ、テトさん」

「私の仕事は何だったか覚えているかね」

えっ？ あー……。突然言われても。

「覚えているかね」

記憶を総動員してその答えを探す。答えは割りとあっさりと見つかった。

「えっと……確か森の魔力量の調節とゴアビーストと人間の王との対談。それから、雑務が色々。でしたっけ」

ふう。答えられなかったら何かある、というわけではないけれど、答えられてよかった。個人的にすっきりする。

テトさんはなぜかうれしそうに笑った。

「その通りだよ。それでは、以前私が約束したことを覚えているかね？」

ええっと。

「人間の国に連れて行ってくれるんですよ」

「その通りだよ。実は明日にでも発とうと思うのだが、どうだね」
よかったあ。って、ええええ！

「えっ、明日、ですか？」

「うむ。何か用事でもあったりなかったりするのかな」

微妙にいつもの口調じゃない。どこかこう、迷っているような感じ。テトさんらしくない。いつも論理的で、話の組み立てを考えてから話す。なのに、ううん。よくわからない人だ。まあ、それは今に始まったことじゃないけれど。

出会ったときからそうだったけれど。

そんなことはどうでもよくて、わたしは反射的に頭を下げてしまった。どうしようどうしよう。別に用事はないけど、暇人だと思われるのも嫌だなあ。思い出すくらいはしておこう。

……。

……。

……………。

そろそろいいかな。

「はい、大丈夫です」

「そうか、ならば明日だ。……そうだ」

「はい？」

「いや、なんでもない」

「いやいやいや。そんな途中で止められても！」

「あの！」

と、声をかける前にテトさんは小さくわたしに笑いかけ、家から出て行ってしまった。

終章 色彩の魔法―前編

翌日、テトさんの予告どおり人の国に出発した。森の外に出たことのないわたしは、一歩もりから出た瞬間に感嘆の声を上げ、『世界』の広さに驚いた。テトさんはそんなわたそを笑った。

「森の外は怖いかね」

テトさんがわたしに笑いかける。

「いいえ。大丈夫ですよ」

正直怖いけど、まあ、テトさんがいるから大丈夫だ。と、そう思った。

「そうかそうか。ならば国へ行こうか」

森からどんどんと離れる。歩いて進んでいるけれど、テトさんが魔法を使っただのか、一歩一歩の進む距離が大きい。普通に考えてありえない距離だ。

「あの、ちょっと進みすぎじゃ」

「なに、問題ないさ。それに、こうでもしないと三日はかかるんだよ。これで歩いて判刻……いや、これで歩くとすぐに着く」

……ハンコク？

「そ、そうなんですか」

この速度で歩きなれないわたしはこけそうになるけれど、そのたびにテトさんがわたしを支えてくれた。よく意味の分からない言葉が出てきたけれど、きっと人間の言葉だろう。

やっと慣れてきたなと思ったとき、急にテトさんが立ち止まった。「うわっ！ ど、どうしたんですか」

立ち止まってニタニタと笑うテトさんは、どこか不気味だった。

「一つ、重要なことを言っておくとするよ」

何だろう。テトさんが笑ってるから、あまり緊張感はないのだけだ。

いや、別の意味で緊張感がある。

「な、なんですか？」

「今から行く場所には——ネルがいる」

ネルは人間の国に入ったすぐの井戸とかいうもの（テトさんが耳打ちしてくれた）に座っていた。

「ネル！」

井戸がどうか、わたしにはどうでもよくて、ただ、ネルに逢えたことがうれしくて叫んだ。

「ミナ！ どうしてここに！」

ネルがわたしに気付いて立ち上がった。そして、こちらに走ってきた。

「私が連れてきたのだよ。ネル」

テトさんがわたしの肩に手を置く。そして、薄く笑った。

「どうして」

憎らしそうにネルはテトさんを睨んだ。

「どうして？ 簡単なことではないかね。必要だと思ったからだよ」

「……………」

ネルは黙ってテトさんを睨んだ。

「私は気まぐれなのさ」

テトさんがチャカすように言うと、ネルはしばらく表情を緩めなかったが、

「相変わらず、ですね」

と言って肩をすくめた。

「ごめん。心配かけるつもりはなかったんだ。それに、テトさんには事情を話したし、手紙も渡して頼んだんだけど」

手紙？ そんなの、わたしは聞いていないし、受け取っていない。

「あ、あゝ」

テトさんが引きつった笑いを浮かべる。そして、とても言いにくそうに口を開いた。

「あれな、必要ないと思って燃やしたよ」

……失礼だけど、馬鹿じゃないのかこの人。

「ま、まあ、許してくれたまえよ。再会しないことが前提の手紙だったのだし」

普段冷静なテトさんが言い訳を言っているのは、見苦しかった。

「私はあんな別れ方はいけなそうと思っただよ。本当に」

もういい。もういいから止めてください。

「それに、ほら、代わりにこうして再会したではないかね。ネルとの約束は破ったが、私はどちらかと言うとミナの味方であって……」
止めてください。

人間の国。

当然初めて来たのだけれど、なんだか面白い。国の門からネルの家までほとんど距離はなかった。面白いのは、沢山の家が並んで建っていること。井戸とかいものがあつて、川が見当たらないこと。

案内されたネルの家は、不思議だった。というか、この国の家全てが不思議だった。地面に直接家を建てている。木はあるが、小さくて、人が住める大きさじゃない。

「これが人間のスタイルなのだよ」

わたしの疑問をテトさんが解消してくれた。

「適当に座つてて」

ネルはそう言つて奥に消えた。

言われるままに椅子に座り、ぼーっと家の中を見回す。内装はあまり森の家と変わりはない。まあ、こんなに広くはないし、あの変な……なんだかわからないものもないけれど。

「キッチンという」

キッチンはない。それ以外はよく似ている。細部に違いがあるだけ。それにしても、なんでネルはここに移住したんだろう。魔力も希薄だし、『森の住人』がほかに住んでいるわけでもないのに。理由のほうは、あとから聞くことにしよう。

ネルお茶を持って帰ってきた。

「ごめん」

「もう、いいって」

「でも……」

「いいんだよ」

何度も首を横に振り、構わないことを強調する。そして、わたしはとてとても大切なことを思い出した。

「あれ？ テトさんは？」

「あ、いない。さっきまでそこにいたのに」

確かにさっきはわたしの隣でニヤニヤしながら座っていたはずだ。いつの間にかどこかへ行ってしまったらしい。

「何考えてるか分からないよね。テトさんって」

「そうだね」

それから、しばらく沈黙が続いた。けれど、わたしは何も怖くは無かった。

少し前まであれほど怖かったのに。

気まづかったのに。

苦しかったのに。

今は何も感じない。

心地よく感じる。

わたしは……強くなっているのだろうか。

いや、これは最初に戻っただけだ。

「実は……」

ネルが沈黙を破ってそう切り出した。

「理由はあとから聞くから、ちょっとわたしの話、聞いて」

ネルが話し出すのを、わたしは意図的にさえぎった。

強くなる一歩を踏み出すために。

終章 色彩の魔法―後編

結局のところ、私がやったことは正しかったのだろうか。いやいや、別に後悔などはしていないのだよ。後悔には全く持つて意味がないのだから。しかし、全ての事情を知る私にしてみれば、気に病むのは当たり前のことであり、気に病まないほうがどうかしているといわざるを得ないのだ。

なんて、そんなことなど思っているはずもなく、私は久しぶりに訪れた人間の国を満喫していた。

「全く変わっていないな」

国の様子は全くといっていいほどに、前とは変わっていないかった。あのままネルの部屋にいてもよかったのだが、本当に留まっているほど私は気の回らない人じゃない。あそこはいなくなるのが良心というものだろう。

さて、と。これからどうしようか。

考えるまでもなかった。人間の国に来たのなら、王に会うのが普通だろう。私は人間とは異なる種族なのだから。

方向を王城に変えて歩き出す。市場を抜けて、噴水のある広場を通り抜ける。人通りがほとんどなくなったところで、城門に辿り着いた。

二人の兵士が私の行く手をふさぐ。

「名前と用件を」

この二人が私を知らないはずがあるまい。前回訪問したときもこの二人に同じ質問をされた。けれど、不愉快には思わない。これが仕事なのだから。

「『森の王』のテトという。本日はこの国の王と対談に訪れた」

兵士は一瞬で視線を送りあい、首を横に振った。

「残念ですが、本日王は『森の王』との面会は予定されておりません」

「忙しいのか？」

問い返すと、兵士は困った表情でまた一瞬で視線を交わした。

「王は常に多忙なのです」

「それは仕事の行い方が悪いのだよ。で、本当のところは忙しいのかね？ 別に事務的な返答はいらないよ」

『森の王』という立場を最大限に利用させてもらおうとしよう。対して用事があるわけではないのだが、ミナとネルの気が済むまでは帰れないだろう。ま、今日中には帰るのだが。

「……王に許可要請をしてみます。少々お待ちください」

一人の兵士がそう言つて、詰め所へ行き何かを始めた。たしか、内線とか何とかいったはずだ。

もう一人の兵士が私を見張る。勝手に城内に侵入することを警戒しているのだろう。ま、私が本気を出せば一瞬にしてこの程度の門など通り抜けられるのだが。

しばらくして、兵士が戻ってきた。

「どうだったのかね？」

すかさず私が聞く。

「許可が下りました。どうぞお通り下さい」

今度は先ほど私を見張っていた兵士が動いた。門の前で何かをしているが、私には彼の体が邪魔で見えない。

「あれは極秘事項なのですよ」

兵士が私に言った。開けっ広げな極秘事項もあったものだ。だからこそ、なのかもしれない。それがどうであつたところで、私には全く関係のないことだ。

「どうぞ」

何かを終えた兵士が戻ってきて言った。大仰な門が開いた。

「人を暇つぶしの道具にするのはやめてもらいたいものだ」

皮肉たっぷりに王が言う。

「そう言うなよ。どうせ暇だったのだろう。争いも何もない国だ。」

やるべき仕事などたかが知れている」

「ふん。それはそなたのほうだろう。聞いたぞ？　ほとんどの仕事をソトに任せているそうじゃないか」

「はっはっは。誰から聞いたのかは知らないが、素晴らしい情報力だ。森の情報を得るとは」

「そなたが自分で言った。忘れているのか？」

「何年前だ？」

「半年前だ」

「……」

「まあ、そなたにとってはほんの一瞬なのだろう。ところで、そなたは後何年、『森の王』であるつもりだ」

「そうだな……。実は考えたこともないのだよ。……三百年くらいかな。二百年くらいは本当の意味で遊んで暮らしたい」

「人間の常識では計り知れない月日だが、そなたにしては一瞬なのだ。二百年は」

「そういうことだ」

私は「くすくす」と嫌らしく、人間の王は「はっ」とシニカルに笑った。

「そろそろ帰ってくれないか？　本当に何の用事もないならな」

「いいのかね？　腐っているとはいえ私は『森の王』だ。そんな態度をとって、百年後くらいに仕返しをするかも知れんぞ？」

「問題ない。そなたはしない」

「……」

「ほら」

ひらひらと手を振って、私を追い払おうとする。

「邪魔したな」

「二度と来るな」

「君もたまには森に来るといい」

「……考えておこう」

外に出て太陽の位置を確認すると、それほど時間がたっていないことがわかった。

今から帰って大丈夫だろうか。大丈夫だ。

「帰ろう」

噴水のある広場を通り抜け、市場の品物に目を向けながら、それでも何も手に取らずに進む。当然だ。人間の通貨など私が持っているはずもない。通貨という概念も人間の国に来て初めて知ったくらいだ。

人通りが少なくなり、居住区に入る。その居住区の端、国の門のすぐ前がネルの仮住まいだ。

「おや……」

ネルの仮住まいから光が漏れている。しかも虹色。それが一体何なのか、なぜネルの家から光が漏れているのか、その全ての理由が私には手に取るようにわかった。そして、自然と笑いがこみ上げてきた。

「ククク……ハハハハ！ 傑作だ。傑作だよ！ ミナ！」

ネルが話し出すのを、わたしは意図的にさえぎった。
強くなるための一步を踏み出した。

そして、今まで保留にしていた約束を果たすときも、同じくしてやってきた。

「うん？」

ネルは言葉を止めた。

「見て欲しいものがあるの」

わたしは立ち上がって数歩前に進む。テーブルの前に立ち、ネルを振り返る。ネルは不思議そうにわたしを見ている。その視線に笑顔を返し、両手に魔力を込めた。

「ミナ？」

「いいから。見てて」

約束。

『星昇る夜』の前夜からずっと果たせなかった約束。見せてあげるってそう言ったのに。

結局は今まで一度も練習すらしていない。

失敗が怖い。

成功も怖い。

『色彩』の魔法を発動することが——怖い。

自分の魔法が、物語が、そこで終わる気がした。

続きがないような気がした。

そんな自分の恐怖心に勝てなくて、ずっとずっと先延ばしにしてきた。けど、今はもう怖くない。

わたしの魔法は、物語は、こんなところで終わらない。

終われない。

わたしにはまだ、まだまだやらなくちゃいけないことがある。

やりたいこともある。

ネルに『森の人』になってからのことを聞かれて、ネルを支えると言った。今までそれはきつと、全然できてなかったと思う。

口先ばかりだった。

前に進まなくちゃいけない。

恐れてばかりで、変わることに怯えていたわたしから。

『色彩』の魔法という、温かく優しい呪縛から解放されなくちゃいけない。

そう思うと、自然と力が湧いてくる。

——強くなれるような気がした。

「お待たせ」

わたしはいつの間にか笑っていた。

終章 色彩の魔法―後編（後書き）

途中で連載が切れた、とかそういう紆余曲折ありながらもどうにか連載を終了することができました。

「星降る森」は僕の最初の連載作品であり、初めて書いた長編（と言えるほどの分量でもないけれど）でもあり、思い入れの深い作品です。

この作品は過去に書いたものを一部、改変したものです。当時の考えのままでいきたかったので、大きくは変えていませんが。

今作はこれで終了ですが、現在、「スクランブルワールド」を連載しています。

こちらは「星降る森」とは全く違った雰囲気の商品になっています。ライトノベルを意識してみました。気が向いたらどうぞ。

最後になりましたが、ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2131k/>

星降る森

2010年10月8日14時49分発行